慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宋刊新唐書について
Sub Title	
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1974
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.11 (1974.) ,p.381- 428
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000011-0381

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宋刊新唐書について

尾崎

康

正となのであった。

○六○)に成立したものであり、その進呈の表とその二日後に杭州で印刷に付すという中書劄子がある。すなわち、この唐書杭州で印刷に付すという中書劄子がある。すなわち、この唐書は厥陽修らによって編纂された直後の、いわゆる初版本という中書劄子がある。新唐書は嘉祐五年(一北宋嘉祐刊本として夙に著名であった。新唐書は嘉祐五年(一北宋嘉祐刊本として夙に著名であった。

刻と断定できる葉があるが、原刻との差異は歴然として、原刻との生みを痛感したし、同版の金沢文庫本の率相世系表(梅沢といよその念を固くした。宋諱欠筆が仁宗の諱の禎字に止まるよいよその念を固くした。宋諱欠筆が仁宗の諱の禎字に止まることはもとより、静嘉堂本には、一部に刻工から南宋前期の補記念館蔵)、さらには長沢規矩也博士が発見、寄進された足利記念館蔵)、さらには長沢規矩也博士が発見、寄進された足利記念館蔵)を関覧するという。

チで美しく刻られ、摺刷もまことによいのである。と足利本にはまったく補刻がなく、文字はこころもち粗いタッはそれよりかなり古い刊刻とみえるからである。しかも梅沢本

北京図書館刊の中国版刻図録では、補修が元代に至る同館蔵北京図書館刊の中国版刻図録では、補修が元代に至る同館をおいらのであって、その根拠は直斎書録解題に思溪円覚蔵経の余なで唐書を刊したとあることである。思溪版の刊年も問題のあなどころであるが、この図録は、一部の経の巻末に付刻されたなところであるが、この図録は、一部の経の巻末に付刻されたなどのであろう。

と補刻の両方の刻工を混えている。補修が元代に及ぶあいだに宋中葉、元時と三期に分けたうちの第一期に、静嘉堂本の原刻しかし、同図録の解説では、この唐書の刻工を南宋初葉、南

初期の版面が汚れてその区別がつかなくなり、実は補刻である。 用いて行われたのであるうと、わたくしは考えたのである。 度が紹興もしくは南宋前期に行なわれたことは、その刻工で証修が紹興もしくは南宋前期に行なわれたことは、その刻工で証修が紹興もしくは南宋前期に行なわれたことは、その刻工で証修が紹興もしくは南宋前期に行なわれたことは、その刻工で証修が紹興もしくは南宋前期に行なわれたことは、その刻工で証明されるものであるから、第一期、すなわち原刻はそれよりく明されるものであるから、第一期、すなわち原刻はそれよりく明されるものであるから、第一次の補修が思溪版の余板を用いて行われたのであるから、第一次の補修が思溪版の余板を用いて行われたのであるうと、わたくしは考えたのである。 用いて行われたのであるうと、わたくしは考えたのである。

思溪版の一帖を見たところ、なんとここに原刻刻工がいたのでには、両者の字様を較べると明らかな相違はあるものの、それには、両者の字様を較べると明らかな相違はあるものの、それには、両者の字様を較べると明らかな相違はあるものの、それには、両者の字様を較べると明らかな相違はあるものの、それには、両者の字様を較べると明らかな相違はあるものの、それには、四部叢刊本の景徳伝燈録に数人をみつけても、これにも刊なければならない。しかし原刻刻工は他書になかなかあらわれなければならない。しかし原刻刻工は他書になかなかあらわれなければならない。しかし原刻刻工は他書になかなかあらわれないままに、補刻がはたして紹興年間に行われたかを確認するために、つまり、補刻がはたして紹興年間に行われたかを確認するために、つまり、補刻がはたいでもない。

に多数の名をみいだすにいたった。て李孜、李敏が名を連ねるのをはじめとして、この諸経のなか

つづいた紹興の末ごろか、つぎの孝宗の代の初めに行われたもとともに思溪版にもみえ、その他の南宋前期刊本にかなりあられたことになった。すなわち、静嘉堂文庫、足利学校遺蹟図書館、梅沢記念の礼を行ったとあるが、その知湖州 在任 の期間が 明らかになごろの刊本であると推定されるのである。また、静嘉堂本と北ごろの刊本であると推定されるのである。また、静嘉堂本と北ごろの刊本であると推定されるのである。また、静嘉堂本と北での門本であると推定されるのである。また、静嘉堂本と北での門本であると推定されるのである。また、静嘉堂本と北での門本であると推定されるのである。また、静嘉堂本と北での門本であると推定されるのである。また、静嘉堂本と北での門本であると推定されるのである。また、静嘉堂本と北であるところから、原刻からさほど年月を隔てないた。

なお、南宋の刊刻の時代を区分することはいろいろ問題がありうる新唐書の宋刊本を一通りとりあげることにする。現在 調査しうるものはもとより、影印本、図録、目録類で知この稿は以上について詳述することを主とするが、関連して

のと考えられる。

刊本にでてくる刻工は、しばしば孝宗の嫌名の慎字を避諱するこの稿でも問題になるように、高宗の紹興年間の刊記をもつこでは大きく前・中・後の三期に分けることにする。

るが、叙述上、一応の区分をつけておかねばならないので、こ

ある。そして、王永従一族のいわゆる刻蔵題記に雕経作頭とし

刊本にもあらわれるし、徐々に変化は生ずるものの、字様も概して似ているうえに、これらの刻工による刻本を紹興の後半まして似ているうえに、これらの刻工による刻本を紹興の後半まして似ているうえに、これらの刻工による刻本を紹興の後半ましたは末で区切る根拠があるものでもない。そして、敦・郭を欠前期と中期とすることになる。避諱欠筆が前帝に止まるか、今前期と中期とすることになる。避諱欠筆が前帝に止まるか、今前期と中期とすることになる。避諱欠筆が前帝に止まるか、今前期と中期とすることになる。とたがって、慎字までを欠画するものとで、朝著に異るのである。したがって、慎字までを欠画するものとでは紹煕(一一九○~一一九五)の五年間をどちらに含めここでは紹煕(一一九○~一一九五)の五年間をどちらに含めると六八年間にも達する。これはあまりに永すぎるかの、字様も概刊本にもあらわれるし、徐々に変化は生ずるものの、字様も概刊本にもあらわれるし、徐々に変化は生ずるものの、字様も概刊本にもあらわれるし、徐々に変化は生ずるものの、字様も概刊本にもあらわれるし、徐々に変化は生ずるものの、字様も概刊本にもあらわれるし、徐々に変化は生ずるものの、字様も概刊本による対するといる。

し、この稿では中・後期の区分はほとんど問題にはならない。十分で、これを曖昧にしたまま論を進めざるをえない。ただ一分で、これを曖昧にしたまま論を進めざるをえない。ただの代り後期が一五年で終る。わたくしはどちらかといえば今上の代り後期が一五年で終る。わたくしはどちらかといえば今上の代り後期が一五年で終る。わたくしはどちらかといえば今上の代り後期が一期を後期の区分は、郭と馴との欠画の差になるが、これが中期と後期の区分は、郭と馴との欠画の差になるが、これが中期と後期の区分は、郭と馴とのだ問題にはならない。

一 新唐書の編算

旧唐書二〇〇巻は五代の後晋朝で編纂されたが(九四五)、

書の成立をみる。

書の成立をみる。

書の成立をみる。

書の成立をみる。

書の成立をみる。

書の成立をみる。

書の成立をみる。

書の成立をみる。

書の成立をみる。

この新唐書の成立について、宋史(巻一二仁宗紀四)

は

ている。 掲げ、皇祐三年(一〇五一)までに王疇が加わったことを述べ し、麟台故事は曾公亮・趙師民・宋敏求・范鎮・邵必の五人を このメンバーを国史志を引く玉海は王堯臣・張方平・宋祁等と の唐書再修の建議、翌五年五月の編修官の任命にはじまった。 とも詳しい。これらによると、慶曆四年(一〇四四)の賈昌朝 台故事(巻三下修纂)に明らかにされており、鱗台故事がもっ 海(巻四六藝文)、直斎書録解題(巻四)、紹興元年程俱撰の麟 ない (巻一七六)。 しかし、その一応の経緯や編修官の名は玉 に新唐書刊修の命が欧陽修にくだったことを掲げているにすぎ 刊修および編修官に進秩、 と記すだけであり、続資治通鑑長編も、右と同じ記事のあとに (巻一九二)、またそれより先、至和元年(一○五四)八月戊申 (嘉祐五年七月) 戊戌、翰林学士欧陽修上新修唐書。 しかし慶暦四年には着手されず、実際には続資治通鑑 加職、賜器幣が行われたことを加え

て、七月戊戌、かれの名によってこれを仁宗に上進した。(1) 曾公亮が提挙編修になり、五年にいたって二二五巻が完成し 奏牘を呂夏卿が調査している。そして嘉祐二年(一○五七)に しいが、唐末の史料が不足して西京内の諸官司の庫の唐五代の 編纂にとりかかった。翌二年には中唐あたりまで進んでいたら として范鎮・王疇・宋敏求・呂夏卿・劉羲叟が協力することで として欧陽修が紀表志を、宋祁が列伝を担当し、これに編修官 長編にみえるように至和元年八月に再び任命が行われ、 刊修官

が、そのほか南宋中期建安刊本、その元代覆刊本、元大徳建康 どの七月一二日上進に先んじており、新唐書はこれより早く成 提挙は至和元年任命の欧陽修らの七人と曾公亮とであり、巻頭 巻末または巻首に付刻された進呈表に曾公亮ら八人、鏤板頒行 路儒学刊本、明万暦北監本、さらには寛延の和刻本などには、 立し、印刷に付されていたことを示すのである。 年六月二四日、中書劄子の日付が六月二六日で、ともに宋史な のも、以上の経緯に一致する。しかし、進呈表の日付は嘉祐五 の上表にもこの名が列せられ、凡そ十有七年にして成るという の中書劄子に富弼ら八人の官銜がある。進呈表の編修官・刊修・ , わゆる嘉祐刊本では足利学校遺蹟図書館蔵 本だけである

いわゆる嘉祐刊本

になる。

校遺蹟図書館蔵の宋刊本の巻末に 新唐書は成立とともに杭州で刊刻されたが、それは、 足利学

嘉祐五年六月二十四日

嘉祐五年六月二十六日准 刊修 中書劄子塞 編修官 八人の官衙一二行

(提挙編修曾公亮以下

聖旨下杭州鏤板頒行

(富弼以下 校勘 校対 八人の官衛一一行

とあることで明らかである。

書館、梅沢記念館、北京図書館が所蔵する四本である。 がわからず、いま存在が知られるのは静嘉堂、足利学校遺蹟図 祐刊本は、天禄琳琅書目に著録されていたものはその後の所在 たるとして、長く嘉祐刊本と称せられてきた。このいわゆる嘉 本と同版の天禄琳琅本、旧陸氏皕宋楼蔵の静嘉堂本がこれにあ くから知られ、仁宗の諱を欠画し、字様もやや古体を示す足利 この官銜は元刊本などにも付刻されていたから、この事実は早 この足利学校本が発見されたのはごく近年のことであるが、

原刊本でないことはたしかであり、嘉祐刊本は現存しないこと ころから、これは嘉祐刊本の覆刻であるかも知れないが、その の刊本であることが判明した。仁宗までという欠画が厳格なと しかし、以下に述べるように、これらは南宋の紹興七年ごろ

の静嘉堂蔵本が底本とされ、欠巻は北京図書館本などで補われ 多いので、百納本二十四史の発刊にあたっては、 いずれにしてもこれが現存最古の刊本であり、残存の巻数も 新唐書にはこ

た。百納本の新唐書についてものちに述べる。

静嘉堂文庫蔵本

をもって補配) 九〇冊(一部〔南宋中期〕建安魏仲立宅刊本と明万暦二一年抄本唐書残本(存一八八巻) 〔南宋紹興七年〕刊〔南宋前期〕修

| Table | Ta

数) (刻工名)」と刻し、志は「礼楽志」のように小題名も入れ **)、每半葉一四行、行二四~二五字、注文小字双行三一~三 書一/(抵三格) 中書劄子とその官銜はない。首題は「本紀第一 嘉祐五年六月の曾公亮の上表があるが、進呈および鏤板頒 三字。版心白口、上象尾に字数がなく、「唐書本紀(列伝) 史館脩 判秘閣臣欧陽修奉/勅撰」。左右双辺(二一・二×一四 **侹鋘敬儆曔璥憼鷩警**弘泓殷溵匡境鏡胤炅煩恒暅禎貞損徴の各字 も南宋前期のものと認められる。欠画は、玄胘玹泫炫弦鉉朗珽 改装後補乳白色表紙 原刻葉は仁宗の諱に止っている。補刻葉も僅少の例外を除 補刻葉も同じ。刻工については別に記すが、原刻・補刻と 翰林学士兼龍図閣学士朝散大夫給事中知制 (二七・九×一七・三ボ)、襯装。 (抵一一格) 首に 語充 行の

明で、 明瞭である。 消した折に落したものらしく、原本は欠いていない。 信用しがたい。現に足利学校本の原刻刻工は王端・王端・呉紹 が、七字ある遷をまったく欠画しないから、原本に確めないと 修正が多いし、そのつぎの第九葉は補刻で刻工が李時である り、静嘉堂本が欠巻で北京図書館蔵本が用いられている巻一〇 原刻葉は印面にかなり磨滅のあとがみえ、補修版はきわめて鮮 第九葉裏・刻工朱明)。 で章彦はなく、むろん欠画してはいないから、章彦の名は誤 第一○葉表・刻工施珣)。百納本を検すると同じような例があ にもみえるが、ここもたまたま補刻葉で避諱されている(巻四 原刻を存し、これをまったく欠画していない。吉頊の名は本紀 末筆を二○回にわたって欠いている。この二葉は足利学校本は いて同様で、 九葉裏に慎字の末画がみえないが、これはおそらく書入れを抹 て入れたとしか思えないのである。やはり百納本の巻一九五第 一二回と各三画を欠いている。もっとも百納本には文字の加筆 っていて、これも蕭遘の伝であるために、遘字をそれぞれ三・ 一の第七・八葉は、章彦・章宇という原刻・補刻の刻工名が入 れていた。補刻葉の例外とは、たとえば巻一一七第七・八 (刻工施沢)の吉頊伝であるが、項字が神宗の諱とあってその 静嘉堂本の補刻葉には完字を欠画した例がある(巻一一一 字様にも多少の相違があるので、 ただし補刻葉はあまり多くなく、巻によって異る このことが嘉祐刊本であることの一つの証 慎字は頻出するが、 両者の区別は一見して 欠画の例はない。 そのほ

徹覚労倦不可以風兀生/安閑小室点読終巻

咸淳

なるものであろう。

一部に朱の句点と勾点、朱引が施され、眉上に墨筆で干支や一部に朱の句点と勾点、朱引が施され、眉上に墨筆で干支や重要事項の見出し、通鑑との校異、校字などが書入れられてい重要事項の見出し、通鑑との校異、校字などが書入れられてい重要事項の見出し、通鑑との校異、校字などが書入れられている。たに掲げるように諸巻の末に、南宋末の景定五年(一二六中)から咸淳三年(一二六十一)のであろう。

一〇 景定甲子八月八日点抹終巻安詩識 一 景定甲子夏五下七点抹終巻/会稽李安詩識于克斎

三〇上 景定甲子九月三日点校終巻安詩識三〇上 景定甲子九月三日点校終巻安詩識二七上 景定甲子八月廿九日点抹終巻安詩識

三五 景定甲子九月五日点抹終巻安詩識

四七 甲子九月十八日点抹終卷李安詩識

景定甲子重陽日点校終巻安詩識

六○ 景定甲子九月廿八日点抹終焉安詩識 五四 景定甲子九月廿七日点抹終焉安詩識

九一 景定甲子十月初六日点抹終巻安詩識八二 景定甲子十月三日点抹終巻安詩識

一〇八 景定甲子臘月四日点抹終/巻会稽李安詩識

一一五 景定甲子臘月十二日点抹終巻安詩識

景定甲子歳除日点抹終巻安詩識

「こ)

「成淳乙丑臘月九日点抹終巻安詩ー四一

「成淳乙丑臘月九日点抹終巻安詩

五〇 余以憂患之余不親書冊久矣前之日/母氏小祥連日

三三下 二八 二四 二〇七 100 一九三 二三五下 考証不敢輒/下雌黄姑俟善本当更是正会稽李安/ 咸淳丁卯戊寅標点終秩但其/閒有一二字誤無佳本 咸淳丁卯四月十九日点抹終巻李安詩識 咸淳丁卯四月癸酉点抹終巻会稽李安詩 咸淳丁卯四月四日点抹/終巻会稽李安詩 咸淳丁卯三月下五題点終巻会稽李安詩 咸淳丁卯三月中七点抹終巻会稽李安詩 咸淳丁卯三月十六日標点終巻会稽李安詩 丙寅十二月/二十二日会稽李安詩謹識

正郷貢免解進士充府学直学李安詩」の銜名があり、景定五年ま履仕無攷」ながら、嘉定壬申(五年)刊の大事記の末に、「同校の書を精読したということである。儀顧堂題跋巻二には「安詩記にみえる以上に知るところはないが、宋末に三年かかってこ本安詩 字は伯之、号は克斎、会稽の人 と識語およびつぎの印本安詩 字は伯之、号は克斎、会稽の人 と識語およびつぎの印

詩謹識是日陰雨書于/六友堂

巻三末に万暦二一年(一五九三)の充菴居士の識語がある。 さらに、巻末には明の永楽八年(一四一〇)の銭塘梁某の、平)蔵の大事記通釈存二巻一冊(欠巻一)には刊・校記がない。

蔵書志巻二〇に著録されるが、原本は残存せず、中央図書館(北で五三年、 まさにその人であるという。 この刊・校記は皕宋楼

余以囊橐暫乏託之友人宋節貰/来旬日始償価書以示吾子孫此書逮今一百四十余年来自杭/之桂翁年逾八袠見覊於余/

当謹保之毋忽時/大明永楽八年歳次庚寅夏五月望 (下欠)/(印 日 銭 唐

先賢之嗜学与予之苦心尚其宝護斁云時/万曆癸已重九充蕃 有年第中多残欠兹以燕間抄録装繕俾成完璧書示/子孫使知 此宋板唐書為銭塘李氏蔵本予為其字画無訛標抹詳好/珍収

居士識(印

が示されている。これは行款、字様ともに原本を模した端正な 汪鑑」および原刻と同じ「王益」の刻工名を録していて、 抄写であり、巻七一のごく一部の葉の版心の下象尾に、「監生 後者によって、 一五巻余におよぶ補写が万暦に行われたこと 明代

書印が捺されているから、それより半世紀早い充菴居士の抄録 の補写巻の冊首にも清順治四年(一六四七)進士の季振宜の蔵 にいたる逓修本にもとづいたものかと思わせるふしがある。 る。 稀に欠葉がある。巻七五下宰相世系表第一五~二九・三八葉の 士ともに未詳である。そのほかにまだ欠巻があるが、存巻にも 装繕がこれにあたるとみてよかろう。ただし、銭塘梁氏、充菴居 記念館蔵の原刻本と同版であって、「盛」(銭盛)の刻工名も同 ことはあると思われる。巻七一下第五葉は原刻葉であり、 れないが、補修に際して誤字などの原板のごく一部を修正した わけではないから、版面の一角を修補したような跡はみうけら も訂してある。また、原刻葉は判読に苦しむほど破損している 一六葉は原欠で、そのまま版心に通しの葉数がつけられてい 百納本二十四史の新唐書ではこの欠葉を別本で補い、 梅沢 ح

> しいし、百納本も他本を用いている。 修正して無難に収めている。 かえしたということである。 際に訂したものであろうが、補修にあたって無用の誤りをくり 次行初にもあるから、 じであるが、裏の第一○行の末字が梅沢本は墨釘としているの を、静嘉堂本はこれをおこして「居」字を入れている。 し、八九が存在するように書かれているが、この九巻は現存 装訂の状態と冊数からみて、皕宋楼以来欠巻であったら 初刻で誤って重複させたのをその校正 なお、百納本はこの行全体に加筆 なお、従来の書目等には巻一八

印/士鐘」(陰)「閬源/真賞」、「帰安陸/樹声叔/桐之印」(陰) 谷/蔵書」(陰)、「季振宜/蔵書」「季印/振宜」「滄/葦」、「汪 記」「子々孫々/永用之」(陰)、「樹悳/堂子/孫保之」(陰) 蔵印は「李安詩/伯之克/斎蔵書」、「銭唐梁/氏珍蔵/書 画

の各種。 原刻葉の刻工にはつぎのものがいる。

字は画数。印刷上略字を用いた場合も旧体の画数を数え、 刻工名は原則として姓名のあるものを掲げ、一字のものはとらない。

その順に排列した。

7余俊 李敏 王益 周畢 莫忠 周熚 李順 呉邵 王春 毛易 10徐氏 陸通 沈草 王祖 呉紹 12華元 11章中 8周志 王端 呉諧 王 章忠 周富 雇中 王震 章
立 周祥 雇仲 13董三六 李攸 史復 王昌 6江通

三八七

銭盛 銭陽 17謝氏 20厳先 華四三 董安 董湯 虞集 15蔡挙 蔣済

16衛祥

これらは他書にあまりみかけない刻工であるが、長沢規矩6先 7李 沈 8周 町 明 11敏 章 13董 18挙

これらは他書にあまりみかけない刻工であるが、長沢規矩也とれらは他書にあまりみかけない刻工であるが、長沢規矩也をも欠画していないが、唐書と同じ刻工が一本の大半を占め、唐書と同じ刻工が一本の大半を占め、唐書と同じ刻工が一本の大半を占め、唐書と同じ刻工が一本の大半を占め、をも欠画していないが、唐書と同じ刻工が一本の大半を占め、をも欠画していないが、唐書と同じ刻工が一本の大半を占め、をも欠画していないが、唐書と同じ刻工が一本の大半を占め、をも欠画していないが、唐書と同じ刻工が一本の大半を占め、をも欠画していないが、唐書と同じ刻工が一本の大半を占め、をも欠画していないが、唐書と同じ刻工が一本の大半を占め、本とみるのが自然であろう。そしてその刊年は紹興四年と思われるのであるが、いまはまだそれを確定できない。

はあらためて考証したいが、南宋二代孝宗の慎字までを避諱し と宮内庁書陵部蔵、それに中国版刻図録所載の外台秘要方は南 実前期の刊本と推定されるが、この刻工に王介・王成・江通・ 実部がいて、字様も唐書に似ている。紹興中明州の刊とされる 「(き) いる。いわゆる眉山七史本の宋書・梁書・陳書・北斉書の原刻いる。いわゆる眉山七史本の宋書・梁書・陳書・北斉書の原刻いる上述が刻工となって (5)

咸淳臨安志(静嘉堂蔵本)に王春・王真の名がみえる。五七)刊の通鑑紀事本末(静嘉堂蔵本)に王介・王春、そして跋刊の石林奏議(静嘉堂蔵本)に王震、後期の宝祐五年(一二蔵刊の石林奏議(静嘉堂蔵本)に王震、後期の宝祐五年(一二〇六)

るか、ということになろう。 でつながら刻工の一致する刊本が存在する南宋前期の刊刻であれてきたように北宋嘉祐の刊本であるのか、あるいは一、二名いとして、焦点は、唐書が、景徳伝燈録とともに従来からいわが、南宋中・後期の五例四人は同姓同名などで問題にはなるまが、南宋中・後期の五例四人は同姓同名などで問題にはなるま

4王昇 王祚 王端 5史郁 6朱明 7只唐書の補刻葉の刻工は、つぎのとおりである。

李文

16銭端 18戴全 28厳詵 21顧諲 11張通 張詵 章宇 章受 章容 莫中 莫允二張通 張詵 章宇 章受 章容 莫中 莫允本級 沈珍 9施珣 施沢 胡寔 19孫容 徐用

朱明が、それぞれ刻工となっている。そのほかにも明・董昕・董暉・蔡通が、後漢書(中央図書館等蔵本)にまた明が、漢書(静嘉堂等蔵本)に李文・陳説・章宇・ 陳説・董と思っているが、この史記(宝礼堂宋本書録)に右のうちの朱本紹興中両淮江東転運司刊の二史についても稿を改めたい

などが見出される。 漢 (章 (養¹¹) 周易注疏(越刊八行本・足利学校遺蹟図書館蔵本)(3) 史記(〔淳熙〕刊・静嘉堂蔵本) 外台秘要方(〔南宋前期〕刊・静嘉堂蔵本) 粋8 (紹興九年臨安府刊・北京図書館蔵 (紹興九年臨安府刊・北京図書館蔵 章宇 陳説 朱明 董昕 董昕 胡寔 蔡通 董明 朱明

現在は、北京図書館善本書目巻六に でいたによって、補刻が南宋前期に行なわれたことに疑いのこれらによって、補刻が南宋前期に行なわれたことに疑いのこれらによって、補刻が南宋前期に行なわれたことに疑いのこれらによって、補刻が南宋前期に行なわれたことに疑いのこれらによって、補刻が南宋前期に行なわれたことに疑いのこれらによって、補刻が南宋前期に行なわれたことに疑いの

下象尾に刻工名は記されている。国立中央図書館宋本図録図一 辺(二一·一×一七·二公分)、一〇行·二〇字、版心白口、紙背 かにいる。中央図書館蔵本は存巻二四~二七の一冊で、左右双 も刻工名も一致し、その解題に列挙された刻工はすべてこのな 模写ではないが かなり 忠実に 行ったものらしく、 印があったと伝えられる。張氏の書写も同じく一○行・二○字、 宋一廛賦注によれば、 黄丕烈の印記は掲げられておらず、 「菦圃収蔵」の蔵印をもつという。汪士鐘の旧蔵本ではあるが、 はやはり乾道六年公牘紙印とあり、「汪印士鐘」「閬源真賞」、 四三所掲の同館蔵零本の巻二四首半葉の書影と較べると、行款 口の印刷罫紙を用いたとみえてこの題は略されているものの、 背は宋の乾道六年(一一七〇)の官司簿帳で、湖州の諸官廨の とあるものであろう。一方、黄氏旧蔵本は、百宋一廛書録・百 北山 小集四 十卷張金吾、邵淵耀、方若蘅、柳瀛欽北山 小集四 十卷 宋程俱撰 清道光七年張蓉鏡家抄本 四〇巻、毎半葉一〇行、毎行二〇字、 黄氏旧蔵本の端本であるか 版心が 大黒

ものが補刻の刻工と同名である。そして、文中、孝宗の諱・嫌 であるが、 4王昌 胡実 李林 ے 10徐松 董*章* 明 宗 のうち。 王明 董*章。 暉 彦 徐栄 沈祚 印を付けたものが唐書の 王栄 15 滕昱 6 章* 容 師詢 沈祥 ·朱明 9 7 施*宋 詢 明 16銭寔 12童祈 高彦 原刻の、 13 董宇 11陳明 李松 *即の 李* 崧

はわからない。張氏写本によると、

この北山小集の刻工は

名の春・慎の両字は避けて、「網」「御名」と小字で書いておれるの春・慎の両字は避けて、「網別工が当時まだ存命していた。 ままの情刻もこのころ活躍していた刻工である。北山刊本であり、かれらはそのころ活躍していた刻工である。北山刊本であり、かれらはそのころ活躍していた刻工である。北山刊本であり、かれらはそのころ活躍していた刻工である。北山村本であり、かれらは三三人のうち一人、唐書補刻からなら三二人小集からいえば三三人のうち一人、唐書補刻からなら三二人小集からいえば三三人のうち一人、唐書補刻からなら三二人小集からいえば三人ののであるが行われている。また、わずか二人ながら、原刻刻工が当時まだ存命している。また、わずか二人ながら、原刻刻工が当時まだ存命している。また、わずか二人ながら、原刻刻工が当時まだ存命している。また、わずか二人ながら、原刻刻工が当時まだ存命している。また、わずか二人ながら、原刻刻工が当時まだ存命している。また、わずか二人ながら、原刻刻工が当時まだ存命している。また、わずかとは、「知り」ということも着目しておくべきであろう。

である。 である。 である。 である。 では、南宋中期から後期ごろの刊本にもときにみられる名(望)、これは同名の別人であろう。 章宇は、眉山七史のという刻工が寧宗の諱の拡字を「神名」と雕っているが(巻一という刻工が寧宗の諱の拡字を「神名」と雕っているが(巻一という刻工が寧宗の諱の讃の世界館閣録(中央図書館蔵)に、章宇

で、直斎書録解題巻四にまだ例が少くて原刻も南宋初頭とは決めにくかった。ところまだ例が少くて原刻も南宋初頭とは決めにくかった。ところ工があらわれて、両者が近接していることをほのめかしたが、んど確定し、外台秘要方や北山小集には原刻、補刻の双方の刻の上によって、唐書の補刻が南宋前期に行われたことはほと以上によって、唐書の補刻が南宋前期に行われたことはほと

之、後皆取入国子監。初郡人思溪王氏刻蔵経、有余板、呉縝撰。宇文時中守呉興、以郡庠有二史板、遂取二書刻五代史纂誤五巻辉洪變事文志雑録一巻

以刊二史、寘郡庠。中興、監書多闕、遂取其板以往、今

監本是也

とある。巻四は正史類であるから、史記一百三十巻にはじまっとある。巻四は正史類であるから、上史というのが新唐書と五代史記を指すと直ちには理解しにくいところもあるが、王国維は世記を指すと直ちには理解しにくいところもあるが、王国維は世記を指すと直ちには理解しにくいところもあるが、王国維は世記を指すと直ちには理解しにくいところもあるが、王国維は世記を指すとした(海甯王忠愨公遺書二集)。中国版刻図録もこれに拠って、百納本の新唐書で静嘉堂本の欠巻の補配に用いたれに拠って、百納本の新唐書で静嘉堂本の欠巻の補配に用いたれに拠って、百納本の新唐書で静嘉堂本の欠巻の補配に用いたれに拠って、百納本の新唐書で静嘉堂本の欠巻の補配に用いたれに拠って、新五代史七十四とある。巻四は正史類であるから、史記一百三十巻にはじまっとある。巻四は正史類であるから、史記一百三十巻にはじまっとある。

年間のかなり初めのころに刊行され、さして時期を経ないで補書録解題の記事はこの唐書を指すことになり、唐書は南宋紹興に述べるように思溪版は紹興二年前後の雕蔵であるから、直斎に述べるように思溪版は紹興二年前後の雕蔵であるから、直斎いてその一部を調査したところ、全蔵のわずか一割ほどの約五いてその「郡人思溪王氏刻蔵経」、すなわち思溪円覚蔵経につそこで「郡人思溪王氏刻蔵経」、すなわち思溪円覚蔵経につ

の湖州円覚禅院新雕大蔵経律論等目録二巻によれば五八二四巻波羅蜜多経から合字函の大般涅槃経まで五四八函、宋の元偉撰湖州思溪円覚禅院の大蔵経は、南宋初期に、天字函の大般若

修されたことが明らかになったわけである。

が刊行されたものである。函・巻数などにやや相違があるもの の、その開板の事情については、一部の経の巻末にある左の二

1の刊語にほぼ語られている。 (13) 大宋国両浙道湖州帰安県松亭郷思溪居住左武大夫密州観

妻莫 氏保義郎 沖和妻呂 氏并家眷等捐捨家財命工開 察使致仕王 永従同妻恭入厳 氏弟忠翊郎 永賜妻顧 氏 姪武功郎 沖允妻卜氏従義郎 沖彦妻陳 氏男迪功郎 沖元

善利恭為祝延 鏤大蔵経板伍伯伍拾函永遠印造流通所 鳩

今上皇帝聖躬万歳利及一切有情紹興二年四月日謹題 雕経作頭李 孜李 敏 印経作頭金 紹

掌経沙門 幹雕経沙門

覚清

対経沙門 仲謙

都勧縁住持円覚禅院伝法慈受禅師 都緣平江府大慈院住持管內掌法伝教説法大師 都対証湖州覚悟教院住伝天台教真悟大師 対経沙門 慧覚大師 賜紫 浄梵 修敏 懐深 宗鑑

の時期がなかなか確定しにくい。

大宋国両浙路湖州帰安県松亭郷思村居住左武大夫密州観 今上皇帝聖躬万歲利楽法界 一切有情謹発誠心 妻莫氏 保義郎 沖和妻呂 氏与家眷等恭為祝延 姪武功郎 仲允妻卜氏従義郎 沖彦妻陳氏男迪功郎沖元 察使致仕王 永従同妻恭人厳 氏弟忠翊郎 永賜妻 顧氏

> 流通紹興二年四月 捐捨家財開鏤大蔵経板惣伍伯伍拾函永遠印造 日謹題

雕経作頭李孜 李敏 印経作頭 密栄

掌経沙門 法己

対経慈覚大師静仁 慧覚大師道融 賜紫 対経沙門 仲謙 行堅 幹雕経沙門

勧縁平江府大慈院住持管内掌法伝天台教說法大師 緣住持円覚禅院伝法沙門 浄梵

都対証湖州覚悟教院住持伝天台祖教真悟大師

宗鑑

わたって行なわれたものか、五四八○巻にのぼる大蔵だけにそ 禅院で開板されたことが明らかであるが、刊語の紹興二年(一 捨により、浄梵、懐深らの高僧が勧縁、都勧縁となって、円覚 一三二)は、その着手の年代か、完成か、あるいはその前後に これらによって、思溪円覚蔵経は、湖州思溪の王氏 一族の喜

二年(一一二八)に、都勧縁僧の懐深が紹興二年(一一三二) 刊語があること、この造蔵事業の中心である勧縁僧浄梵が建炎 ともに北宋末年の靖康元年(一一二六)に書写開板したという 菩提行経巻一末に王永従の、解脱道論巻一末に姪の王沖允の、 嘉泰年間(一二○一~一二○四)談鑰撰の呉興志にあること、 一一九~一一二五)に王永従、永賜兄弟によって創建されたと この点について小川貫弌氏は、円覚禅院が北宋の宣和中(一

に示寂していることなどから、北宋の末期から始められて、紹

興二年を さほど 過ぎない時期に 完成されたと 推定されている

氏の説に従えば、開板に前後約一〇年を要したということで氏の説に従えば、開板に前後約一〇年を要したということで氏の説に従えば、開板に前後約一〇年を要したということでとはなかなかむつかしい。

しかし、版下の書手が王永従をはじめとするさまざまな人たしばしば宋末刊本ともいわれていたのである。のや、やや大字で字間、行間がつまりぎみのもの、右上りでいのでは南宋初期刊とは思いにくい面も少くない。この端本は、ろでは南宋初期刊とは思いにくい面も少くない。この端本は、の一葉はまさに紹興の風を思わせるが、それよりかなり固いもの一葉はまさに紹興の風を思わせるが、それよりかなり固いもの一葉はまさに紹興の風を思わせるが、それよりかなり間いもの一葉はまさい。

に共通しあっている。そして、そのなかに紹興二年の刊語の二大半は平均した調子をもっていて、しかもその刻工名がたがいな箇所があるなどして、字様は必ずして一定しないが、全蔵のちであったし、刻工の個人差に加えて、同一人の刻工にも粗略

字文号の前後がその順序となったであろうから、これらの諸経 属する。大蔵の印行は当然計画的に行われ、必ずしも天地…… 経同巻)は卿字函と、いずれも全蔵のうちはるかに後方の部に 字函、尼妙悟大師浄覚による月連所問経・外道問大乗我義経(二 変に発憤して血書したといわれる阿毘達摩倶舎釈論巻二一は守 よる菩提行経は槐字函に属し、小野玄妙氏が比丘覚元が靖康の 入があるにしても、 なり早かったことをものがたるものであると考えられる。 の版下が北宋最末に書かれていたことは、開板事業の進行がか の順の通りの必要はなかったかもしれないが、全体としては千 るのが妥当であろう。 葉も含まれるのであるから、一部に補刻、追雕、または別版 思溪版は紹興のごく初年に刊行されたとみ 王沖允書の解脱道論は背字函、 王永従に の混

得ていると思われる。もひとまず完成していたことになろう。小川氏の所論は正鵠をうに紹興六年八月の宇文時中の知湖州就任のころには、思溪版のに紹興六年八月の宇文時中の知湖州就任のころには、思溪版この思溪版の余板で唐書を刊刻したとなると、つぎに述べるよこの思溪版の余板で唐書を刊刻したとなると、つ満州の字文時中がそして、直斎書録解題の記事によって、知湖州の字文時中が

庫蔵経などを調べさせていただいたが、とうてい一蔵五四八○はこれらにもとづき、大谷大学図書館蔵の一部、大東急記念文員会、小野玄妙、小川貫弌氏らによって報告されている。いま員会、小野玄妙、小川貫弌氏らによって報告されている。いま上寺、中尊寺等に蔵せられ、その一部については文化財保護委上寺、中尊寺等に蔵せられ、その一部については文化財保護委上寺、中尊寺等に蔵は鎌倉時代以来、幾部か舶載されたらしく、いま思溪版大蔵は鎌倉時代以来、幾部か舶載されたらしく、いま

巻のすべてには手が及ばず、とりあえず必要な範囲ということ

でほぼその一割にとどめざるをえなかった。 思溪版は、大半は表紙を失い、または改装されているが、

て裏表紙を包み、合わせた側を上とする帖装に仕立てられてい 装を残すものも少くない。原装は、黄土色の表紙が左右に延び

界六行、毎行一七字、毎紙玉折。首に経名、巻次を題し、下方 る(約三〇×一〇・五ギ)。 天地単辺(二四~二五ギ)、 毎折無

に函号の千字文、次行に数字を抵して撰・訳者名を記す。その

に隠れるようになっており、また巻末には各巻ごとに音釈がつ 号)(題名)(葉数)(刻工名)」が刻されて、これが継目の内側 つまり各紙とも本文の右端に 丁合せのための「(千字文函

徐杲

范瑞

10 孫立

徐貴

徐義 徐阿四

馬成

馬宗

馬宗顔

徐華

張海 馬寿

張聚

張錫 高起

章浩

章珎

高紀 徐顔

11 崔林

常秀

施宏

施門

画はきわめて稀に敬字にみられるほかは、ほとんどされていな ごとに一函とし、これに千字文号がつけられている。なお、欠 いているが、この二点が思溪版の特徴である。だいたい一○帖

に大谷大学図書館蔵の思溪版のうちの約五○○帖からつぎのも のを検出しえた。

刻工名が継目の糊付けされたところにあってみにくいが、主

魚乙郎

魚大宗 陳紹

魚大唐

魚大娘

魚母唐三娘 魚李

陳玘 章祥

陳庚 章敏 張浩 馬珎 徐雅 徐秀 范瑞 施明

公禾(翁和) 丁寧 王珎 3万→萬 毛道 王栄 王政 王睿 王用 于成 王°王°于 祖 成 迪 王顕 5付先

 大王昌 4 中立

 王宗
 王昌

 工宗
 王昌

 王°王 益宗

> 金栄 9 兪成 周琦

> > 芦↓

金二

8周育

孫遘 徐珎 洪先 兪原 徐 氏 洪吉 姚珍 徐高 徐庸

陳景 陳明 許亮 陳昇 陳世 陳琪(其) 陳亮 陳出 陳詔 陳哲 陳立 陳浩

黄廿六 魚宗亮 魚念六 童済 魚保奴 12 馮成 恵祥 馮辛 湯立

盛立

黄廿八 楊彦 黄常 葛方 黄俊 葛古 楊寔

三九三

唐書には三二〇〇枚以上、五

箇所に偏在するということはない。 に散らばって数回から数十回にわたってあらわれ、ごく一部の書補刻の刻工と同名である。かれらの名はそれぞれ全蔵の各所書のうち、。印のついた一五人は唐書原刻、*印の二人は唐

うち、紹興九年刊の毛詩正義・漢官儀・文粋の刻工と一致する では手をくだしている。また、王昌は一部には大王昌と自署し には手をくだしている。また、王昌は一部には大王昌と自署し には手をくだしている。また、王昌は一部には大王昌と自署し には手をくだしている。また、王昌は一部には大王昌と自署し を、両者はほとんど時を隔てずに離印されたものであり、直斎 ら、両者はほとんど時を隔でずに離りされたものであり、直斎 のであろうが、それが唐書には刻工となっているのであるか のであるうが、それが唐書には刻工となっているのであるか のであるが、本れが唐書には刻工となっているのであるか のであるが、本れが唐書には刻工となっているのであるか のであるが、本れが唐書には刻工と本籍と自署し

してよいであろう。

時中がこれを用いて新唐書と五代史記を刊行したというのは、刊刻したとき、多数の版木が余ったので、呉輿に赴任した宇文ともかく、北宋末から紹興初年にかけて思溪王氏が大蔵経を

らかがわせる。

史に八人、外台秘要方に七人とあって、たがいに密接な関係を

ものが五人、同一八年刊の花間集に二人、

両淮江東転運司刊三

Ŧī.

代史記七四巻

宋欧陽修撰

宋徐無党注

〔南宋初期〕 刊

準備されていたものであろうか。 大蔵経の版木は一○万枚にも及ぼうというから、よほどの量が代史記を含めると四○○○枚もの版木を要したのであろうが、

それはさておき、この唐書の刊年を、中国版刻図録の編輯に

疑いの余地のないものとなった。

である。この在任期間では、それもおそらくは紹興七年と限定もって新唐書と五代史で刻刊されたのは、まさにこの間のこと大年八月丙辰から八年正月甲午まで知湖州となっていることに大年八月丙辰から八年正月甲午まで知湖州となっていることに大年八月丙辰から八年正月町午まで知湖州となっていることに大年八月丙辰から八年正月町午まで知湖州となったいる版の余板を次にの刊語の紹興二年の翌年にしたにすぎまい。それより、字深版の刊語の紹興二年とされるが、これは思加わったかと思われる宿白氏は紹興三年とされるが、これは思加わったかと思われる宿白氏は紹興三年とされるが、これは思

るといわれ、問題はいささか微妙になってくる。 本であるが、両名が雕った葉は南宋前期ないし中期の補刻であし、阿部隆一氏の調査によると、この五代史記は南宋初期の刊し、阿部隆一氏の調査によると、この五代史記は南宋初期の刊に華元と、思溪版にいる付先の各がみえるからである。しかが相当すると思われるふしがある。刻工に思溪版・唐書原刻とが相当すると思われるふしがある。刻工に思溪版・唐書原刻と

のほに弱いぎに目をの可なに消ぎることなるに記述されて、ほ一八冊(巻三四~四一・四九・五〇・五五~五七補写)

首の陳師錫の序と目録の前半は補写。「五代史記巻第一/(坻

ことも無理ではないという。単字の刻工名は南宋初期には比較七年の刊として、当時の刻工の付先や華元が補刻の方に加わるで、原刻と共通するものも少くない。数量からいえば補刻薬がで、原刻と共通するものも少くない。数量からいえば補刻薬が歩上のほかは、上・下・万・元・公・付・尓・立・全・先・安上のほかは、上・下・万・元・元・強のは、付先・華元・華・陳・適・機など単字のものであり、補刻も、付先・華元・華・陳・適・機など単字のものであり、補刻も、付先・華元・

双魚尾で字数を刻し、刻工名も元人のものらしい。史記跋(にいう残本(巻一~一二)は、同版のようでもあるが、「東宮文庫」印がある。なお、蔵園羣書題記巻)(北宋本五代睹せざるをえない。この本は日本訪書志著録、「古家館」(陰)、

的少いものの、思溪版でも巻帙によっては珍しくないが、いさ

左従政郎紹興府録事参軍徐俊卿校勘

さか唐書との相違点がめだち、同期の刊と断定するにはなお躊

うのは、やはり章中ら唐書と同じ四人の刻工が主に雕った四部とになる。さらに、前述の景徳伝燈録紹興四年釈思鑒刊本といそしてまた、思溪円覚蔵経はこのときまでに完成していたこ

本書目のように誤解されたものと推察されるのである。は前者に失われて後者に残っているところから、北京図書館善書補刻と同じころの南宋前期刊の一五行本にも掲げられ、いまともとこの本のために書かれたものが、引きつづいてつぎの唐叢刊本の底本の方であって、その旨を述べた劉棐の後序は、も

ある。ほぼ各巻末に九巻三二冊がある。紹興刊新唐書と同じく一四行、二五字本で九巻三二冊がある。紹興刊新唐書と同じく一四行、二五字本での旧唐書に影印された、紹興中両浙東路茶塩司刊の唐書残本六なお、北京図書館に、鉄琴銅劒楼旧蔵のころ百納本二十四史

右文林郎充浙東路茶塩司幹辦公事蘇之勤校正右文林郎充両浙東路提举茶塩司幹辦公事蘇之勤校勘左牽議郎充紹興府局学教授朱倬校正左從政郎紹興府録事参軍張嘉賓校勘左、政郎紹興府録事参軍張嘉賓校勘

人、外台秘要方と実に二八人、両淮江東転運司刊三史と五人、人、外台秘要方と実に二八人、両淮江東転運司刊三史と五人、忠溪版と共通するもの五人、紹興九年紹興府刊の毛詩正義と九二朱倬伝)、そのころの刊本と推定されている。嘉定一四年創設といわれる「紹興府鎮/越堂官書」の大型印もみえる。百納設といわれる「紹興府鎮/越堂官書」の大型印もみえる。百納武によれば、朱倬が教授になったのが紹興初年で(宋史巻三七三朱倬伝)、そのころの刊本と補対の、中国版刻図録(図版七三)の考などの校勘校正の銜名があり、中国版刻図録(図版七三)の考などの校勘校正の銜名があり、中国版刻図録(図版七三)の考などの校勘校正の銜名があり、中国版刻図録(図版七三)の考などの校勘校正の銜名があり、中国版刻図録(図版七三)の考などの校勘校正の銜名があり、中国版刻図録(図版七三)の考などの校勘校正の銜名があり、中国版刻図録(図版七三)の考などの検討を正面には、

が、ごく近接した時期に紹興府と湖州府で刊印されたというこ百納本でも構・彀・雊・勾字を欠いたのが認められる。両唐書眉山七史と三人を数える。宋諱欠筆は構字までとされており、

でやすいことでもあるから、刻工名の対比には注意を要する。 でやすいことでもあるから、刻工名の対比には注意を要する。 でやすいことでもあるから、刻工名の対比には注意を要する。 でやすいことでもあるから、刻工名の対比には注意を要する。 でやすいことでもあるから、刻工名の対比には注意を要する。 でやすいことでもあるから、刻工名の対比には注意を要する。 これらの諸書を彫った刻工は、思溪版がいまのところ一二○ これらの諸書を彫った刻工は、思溪版がいまのところ一二○ これらの諸書を彫った刻工は、思溪版がいまのところ一二○ これらの諸書を彫った刻工は、思溪版がいまのところ一二○

ちに行なわれたわけである。原刻が紹興七年としてその末年まであったにしても、唐書の原刻と第一次の補修はその一代のら離版にあいついで参加している。かれらが紹興二年にまだ若年司公使庫刊の資治通鑑、同九年の文粋と漢官儀、外台秘要方の所に頻繁にあらわれて活躍し、そのあと紹興三年両浙東路茶塩蔵に従事した董明と董暘がいた。とりわけ董明は思溪版にも随蔵に従事した董明と董暘がいた。とりわけ董明は思溪版にも随

むしろ当然のことである。 台秘要方や北山小集に双方に共通する刻工の名がみえるのも、で二五年、補刻の年代もその前後と推定して大過あるまい。外

· 天禄琳琅書目著録本

五六・五七)の四巻には、静嘉堂本とおなじ李安詩や銭唐梁氏本で・五七)の四巻には、静嘉堂本とおなじ李安詩や銭唐梁氏れるが、これは全二二五巻の首尾完具のようで、首の曾公亮のれるが、これは全二二五巻の首尾完具のようで、首の曾公亮のに来本」「御史振宜之印」が静嘉堂の存巻と同じ巻にも捺さい「宋本」「御史振宜之印」が静嘉堂の存巻と同じ巻にも捺さい「宋本」「御史振宜之印」が静嘉堂の存巻と同じ巻にも捺さい「宋本」「御史振宜之印」が静嘉堂の存巻と同じ巻にも捺さい「宋本」「御史振宜之印」が静嘉堂の存巻と同じ巻にも捺さい「宋本」「御史振宜之印」が静嘉堂の存巻と同じ巻にも捺さい「宋本」「御史振宜之印」が静嘉堂の存巻と同じ巻にも捺さいし、静嘉堂本とおなじ李安詩や銭唐梁氏巻一〇〇・一〇一(列伝二五・二六)、一三一・一三二(列伝書表、尾の首公元の首を表しているから、両本が別本であることは明めたという。

○一が建刊本補配といずれも原本を欠いており、静嘉堂本のことされる。静嘉堂本は巻一○○・一三一・一三二が補写、巻一/永用之」(白文)印が巻一○一・一三二に、「梅谷/図書」「樹徳/堂子/孫保之」(白文)印が巻一○一・一三二に、「梅谷/図書」すなわち「李安詩/伯之克/斎蔵書」印が巻一○○・一○すなわち「李安詩/伯之克/斎蔵書」印が巻一○○・一○

などの印記があるという。

保のある造紙家の印記かと考えられている。 「武侯之裔」の篆文紅印があり、宣城諸葛氏に関本の紙背には「武侯之裔」の篆文紅印があり、在だし、静嘉堂本の僚巻かと想像される。也に無印の巻も含まれていたであろうが、それらを除く大半の也に無印の巻も含まれていたであるが、ちょうど改冊された箇所にあため、前巻の尾、後巻の首にあったのであろう。梅・図・徳など多、前巻の尾、後巻の首にあったのであろう。梅・図・徳などもまとんどがそうであるが、ちょうど改冊された箇所にあたもほどんどがそうであるが、ちょうど改冊された箇所にあたもまと、おそらく同版、つまりいわゆる嘉祐刊本であるから、李安あるまいか。ただし、静嘉堂本の補写は明代であるから、李安あるまいか。ただし、静嘉堂本の補写は明代であるから、李安あるまいか。ただし、静嘉堂本の補写は明代であるから、李安あるまいか。ただし、静嘉堂本の補写は明代であるから、李安あるまいか。ただし、静嘉堂本の補写は明代であるから、李安高に関係を表している。二巻づつ続けて持されている。

3 足利学校遺蹟図書館蔵本

書列伝幾 行、行二五字。 版心は虫損の甚しいものも多いが、 白口、 装空押亀甲文繋桐文表紙(二一・二×一四・一ボ)。 毎半葉一四 唐書残本(存巻七六~七九・九一~一三二・一四四~一七二 列伝巻一~一五〇のうちの存一〇九巻である。 4六通 九二~二二五) (葉数) (刻工名)」、上象尾に字数はない。 王祖 毛益 王介 〔南宋紹興七年〕刊 王震 王が 5史復 王成 江戸時代の改 王昌 刻工は、 「唐 王真

た。欠画は仁宗の禎・貞字等に止まる。
と、静嘉堂本の原刻葉にみられるものばかりである。それだけと、静嘉堂本の原刻本である。これをはじめは嘉祐五年の原刻本ととな早印の原刻本である。これをはじめは嘉祐五年の原刻本ととな早印の原刻本である。これをはじめは嘉祐五年の原刻本である。これをはじめは嘉祐五年の原刻本である。それだけと、静嘉堂本の原刻葉にみられるものばかりである。それだけと、静嘉堂本の原刻葉にみられるものばかりである。それだけと、静嘉堂本の原刻葉にみられるものばかりである。それだけと、静嘉堂本の原刻葉にみられるものばかりである。それだけと、静嘉堂本の原刻葉にみられるものばかりである。それだけと、静嘉堂本の原刻葉にみられるものばかりである。それだけと、

一部に朱引・朱圏点が付されているほか、ごく部分的に墨筆

学校」の小型長方印は、わずかにこれをはみだしそうである。 と巻二一末(第一六冊末)と巻末官銜の末の欄外に「上杉安房守 を発見し、足利学校に寄進されたものである。巻一〇三首(第 を発見し、足利学校に寄進されたものである。巻一〇三首(第 を発見し、足利学校に寄進されたものであったが、長沢氏がこれ を発見し、足利学校に寄進されたものであったが、長沢氏がこれ を発見し、足利学校に寄進されたものであったが、長沢氏がこれ を発見し、足利学校に寄進されたものであったが、長沢氏がこれ を発見し、足利学校に寄進されていなかったが、長沢氏がこれ を発見し、足利学校に寄進されている。また、 と巻末官銜の末の欄外に「上杉安房守 を発見し、足利学校の小型印があ を発見し、足利学校の小型印があ を発見し、足利学校の小型印があ を発見し、足利学校の小型印があ を発見し、足利学校の小型印があ を発見し、ともいる。また、

4 梅沢記念館蔵本

数)(河になり。 上象置に存めなく、河によ真に字、注文小字双行。版心白口、「唐書宰相世系表十一下 (葉九葉。左右双辺(二一×一四・二ギ)、毎半葉一四行、行二 五改装後補茶色表紙(二七・五×一九・五ギ)、裏打補修。全四店書零本(存巻七一下) 〔南宋紹興七年〕刊 一冊

王嵩 衛羊 史复 毛易 王震 王介 銭盛 王成 李敏 周富 李謀数)(刻工名)]。上象尾に字数なく、刻工は順に

の一一人である。

書宰相世系表 一冊 金沢文庫旧蔵 宋版」と録され、行方の墨書された貼紙があるが、駿河御譲本の寛永の目録の初に「唐る。表紙見返しに「駿河御譲 金沢本/唐書宰相表 一冊」と 首尾に「金沢文庫」墨印(外郭七・六×一・八ボ)が捺されてい

本」印はない。(5)知れなかったといわれるものが、おそらくこれであろう。「後知れなかったといわれるものが、おそらくこれであろう。「後

「居」字を入木してかえって誤りを復活させたのは、南宋前期第五葉第一○行の末字を梅沢本は墨釘とし、静嘉堂本がここに東に王益の名があるものの、匡郭の傷などの箇所が一致して、葉に王益の名があるものの、匡郭の傷などの箇所が一致して、東に王益の名があるものの、匡郭の傷などの箇所が一致して、東によの人がの場所が一致しているが、この巻は静嘉梅沢本はときに版心の部分が欠損しているが、この巻は静嘉

5 北京図書館蔵本

に修補されたものであろう。

中国版刻図録図版六六所掲の唐書は、「宋紹興刻宋元逓修本中国版刻図録図版六六所掲の唐書は、「宋紹興刻宋元逓修本のいまは不本意ながら、これは百納本二十四史の新唐書の静嘉堂本の欠巻部まがら、これは百納本二十四史の新唐書の静嘉堂本の欠巻部まがら、紹興の原刻葉の残存は少く、ほぼ版刻図録にいうよい。方に南宋前期・同中期・元中期の逓修を経ているとみうけられる。いまは不本意ながら百納本に頼らざるをえないので、あらためて第四節にとりあげる。

三 〔南宋中期〕建安魏仲立宅刊本

1 静嘉堂文庫蔵本

中期建安魏仲立宅刊本と認められる。巻六八・六九は両者にと が一三五首に、「汪印/士鐘」「閬源/真賞」が各冊首にある。 る。印記は「毛/褒」「華/伯」(陰)が巻一〇二首に、「宋本」 ではないが、玄鷲炅恒貞禎徴懲慎敦燉郭の各字に行われてい 字様はやや右上りの整った建刊本の体で、欠画は必ずしも厳格 列伝幾 (葉数)」、双魚尾で、字数と刻工名は入っていない。 每行一九字。版心線黒口、「唐方鎮表幾 る。左右双辺(一九·四×一二·五ボ)、有界、毎半葉一〇行: 嘉祐本より小型(二四×一五キシ)のため、金鑲玉装とされてい で、いわゆる嘉祐刊本の欠巻の一部に補配されたものである。 右の汪士鐘の蔵印がみえないから、この静嘉堂本に拠ったので もに現存し、百納本の唐書にもこの版本が用いられているが、 (堕円)「御史/振宜/之印」が一〇二首、「季振宜/蔵書」(陰) これはつぎの嘉業堂旧蔵、中央図書館現蔵本と同版で、南宋 巻六八・六九、一〇一・一〇二、一三五・一三六の六巻三冊 (葉数)」又は「唐書

2 中央図書館蔵本

(うち補写一三巻) 六七冊 唐書残本(存一九五巻) 〔南宋中期〕建安魏仲立宅刊本

 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **
 **

ことがある。欠画は郭・廓字までで、馴字には及ばない。巻末 葉数が入り、字数と刻工名はないが、稀に上象尾に字数をみる 制誥充/史館脩撰判秘閣臣欧陽 脩 奉 勅撰」。左右双辺(一 次行は三格弱を抵して「翰林学士兼龍図閣学士朝散大夫給事中 り建安魏仲立宅刊本であろう。 粗黒口の元の覆刻本を思わせるものがあるが、他は木記のとお 幾」「唐礼楽志幾」のように種々に題し、双魚尾で、その下方に 九·二×一二·五ギ)、有界、毎半葉一〇行、毎行一九字、注文 双行木記がある。首題は「本紀第一」、七字を抵して「唐書一」、 書目録巻上末に、「建安魏仲立宅刊行 / 収書賢士伏幸詳鑒」の の富弼ら八人の銜名がある。巻二一六の第二〇~二二葉に版心 に、「嘉祐五年六月二十四日/ 進呈」の會公亮ら八人の銜名と 小字双行。版心は線黒口、「唐己幾」「唐書紀幾」「唐書礼楽志 「嘉祐五年六月二十六日准 中書劄子奉/聖旨下杭州鏤板頒行 艶出代赭色表紙(二五·四×一五·五ギ)、金鑲玉装。 首の

氏/蔵書印」「平江汪/憲奎秋/甫印記」(陰)「憲/ 奎」(陰)印/振宜」、「蘇斎」、「汪印/士鐘」(陰)「閬源/真賞」「平陽汪蔵印は多く、「項子京/家珍蔵」「項氏万巻/堂図籍記」、「季

建安魏仲立宅刊行士大夫幸詳察之書両行。

維謹英宗以下不避、従北宋

/抗/心希古」「希古楼」とある。「劉氏/翰怡」「承翰/鈴記」「嘉業堂」「翰怡/玩賞」「御/賜「秋/甫」、「劉印/承翰」(陰)「承幹/心印」(陰)「翰/ 怡」

本出也。

収蔵有項氏万巻堂図籍印朱文長方印、毛褒華父連

目後有牌子云、

是南宋閩本。惟英宗以上諱獸、

し、巻六九末にあるはずの「蘇斎」の印はみえない。さしおいて影印されており、張跋にその旨が触れてある。しかさし納本の新唐書にこの巻六八・六九の二巻だけが静嘉堂本を

誤載されている。

3 北京図書館蔵本

僚巻であった可能性がある。

「大京図書館に巻二七下・二八(志一七下・一八)の二巻一冊北京図書館に巻二七下・二八(志一七下・二八)の二巻一冊北京図書館に巻二七下・二八(志一七下・一八)の二巻一冊北京図書館に巻二七下・二八(志一七下・一八)の二巻一冊

〇行一九字本を著録し、

巻末に進呈および杭州鏤板頒行の中書劄子と官銜があり(静嘉

繆荃孫の藝風蔵書記巻四に

「新唐書二百二十五巻」の しか 冊があり、宝礼堂宋本書録に二二五巻一○○冊と著録され、旧 嘉祐刊本や建安魏仲立宅刊本と同じく、 て書影二葉(二四六・二四七)が掲げられている。 期の天暦二年(一三二九)に右本を覆刻したものである。 減ったものが、宋刊本と称して各所に蔵されるが、これは元中 京書影には二二五巻、「旧帰安姚氏書、 心上象尾に大小字数、下象尾に刻工名が入って、欠画が著しく 網羅的にすぎる。 書館本と毛氏印でと、各本とそれぞれにつながるのはあまりに 補配本と毛・汪氏印で、中央図書館本と項・汪氏印で、北京図 祐刊本と同じとは信じがたいし、 という。しかし、木記の後半の文字がまったく異り、欠画が嘉 静嘉堂本、大垣図書館本、旧京書影の北平本には、い 静嘉堂に二二五巻四八冊、大垣市立図書館に存一八八巻六五 この南宋中期建安魏仲立宅刊本と行款がまったく同じで、版 有此書。 文・閬源真賞朱文両印。汲古閤旧装。藝芸書舎宋元書目内 珠小印、在在処処有神物護持白文方印、 每巻有汪 士 鐘白 4 〔元中期〕 覆刻本 蔵書印にいたっては、静嘉堂 巻首に曾公亮の上表、 見蔵北平図書館」とし わゆる

已が、元の天暦二年に相当するものである。 葉の版心下象尾の刻工名のところに「己巳冬謙徳刊」とある己修を経ている。いずれも建安魏仲立宅刊の木記はなく、巻一首ところがない。また、大垣本と宝礼堂本は明宣徳九、十年の補堂本は一部補写または欠)、宝礼堂本はこれを欠くらしく記す

四八冊 静嘉堂文庫蔵曹書二二五巻 元天暦二年覆南宋中期建安魏仲立宅刊本

け、「己已冬謙徳刊」とある。一部に耳格をもつ。 (一九×一二・三ギン)。一〇行・一九字。版心白口、「(大小字像)唐本紀幾 (葉数)(刻工名)」。刻工はつぎに掲げるよう数)唐本紀幾 (葉数)(刻工名)」。刻工はつぎに掲げるようをほとんど姓を記さず、単字のものが多いが、巻一首葉にだけ、「己巳冬謙徳刊」とある。一部に耳格をもつ。

13愛之 3三 子 子文 子明 山 王 王君粋 王愛之 王栄 5可 正 汝善 江 秀 秀実 范興 遠 16 興 14 寿 美 · 7 亨 10 徐 清甫 17 応 伯 明 弓 4中 予 仇 天 支 文 徐文 技 祐 君美 注 12 善 玄用 君粋 曾華 15 劉 11 卿 9 英 呂 華甫 国用 英玉 志 6 仲

安陸/樹声叔/桐之印」等。「石/林」「家宰/之章」「啓/南」(陰)「臣陸/樹声」(陰)「帰薬もある。朱筆句点が全巻にわたって施されている。蔵印は葉もある。朱筆句点が全巻にわたって施されている。蔵印はたる。巻末に同じく二つの官銜があるが、尾一葉は欠落して校

宋建安魏仲立宅刊・明宣徳九~一〇年修本 六五冊一~六六・八七~九三 存一八八巻) 元天暦二年覆南唐書残本(欠巻一一~一九・四二~四七・四九~五六・六

大垣一郎校/之印」等の蔵印。 大垣市立図書館蔵 大垣「大垣/郷校/之印」等の蔵印。 大垣でない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣とない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣とない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣とない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣とない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣でない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣で変したない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣で変したない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣で変したない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣で変したない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣で変したない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣で変したない。巻末には進呈および准中書割子の官衡がある。「大垣で変したない。巻末には進呈および海中書割子の官衡がある。「大垣で変したない。巻末には進呈および海中書割子の官衡がある。「大垣で変した。

興文署刊資治通鑑に、子明(徐)・王君粋・君美(丁)・英玉(王)劉)・君美(江)・徐文・清甫(江)・華甫(丁・呉)がいわゆる元のような結果を得る。すなわち、徳謙をはじめとして子明(李・さて、右の刻工を刊年の明らかな元版についてみると、つぎ

いて行款をまったく同じくし、覆刻の関係にあることをものが

静嘉堂所蔵の建安魏仲立宅刊本の六巻と較べると、

版心を除

覆刻本ということになる。 (23) 元年(一三二四)西湖書院刊の文献通考に、子明・王君粋・王 「己已冬徳謙刊」の己已は天暦二年(一三二九)とするのが妥 の十三経注疏に、それぞれ刻工となっている。したがって、 の十三経注疏に、それぞれ刻工となっている。したがって、 の十三経注疏に、それぞれ刻工となっている。したがって、 の十三経注疏に、それぞれ刻工となっている。したがって、 の十三経注疏に、それぞれ刻工となっている。したがって、 (23) (24)

四 百納本二十四史新唐書について

の蔵園群書題記の記事から一六行本であることが、一見して識本を主とし、その欠巻を当時の北京図書館蔵本と江安傳氏雙鑑本と用いているという。いま全巻を検すると、静嘉堂本の張元済氏の跋によれば、表の巻八・九と目録に呉興劉氏嘉業をし、その大きなではこれに用いられておらず、うち二○巻(ただし四巻は上中下のいずれかのみ)は雙鑑楼本に拠っている。だし四巻は上中下のいずれかのみ)は雙鑑楼本に拠っている。だし四巻は上中下のいずれかのみ)は雙鑑楼本に拠っている。だし四巻は上中下のいずれかのみ)は雙鑑楼本に拠っている。表八・九の嘉業堂本とは南宋中期建安魏仲立宅刊の一○行本であって、一八○余巻が存するうち、巻六八・六九(方鎮表八・九)の二巻だけを採り、目録の部分は建刊風ながらこれとは別の一四行本である。そして、北京図書館蔵本と江安傳氏雙鑑素祐刊本の後修と思われる一四行本であることが、一見して識嘉祐刊本の後修と思われる一四行本であることが、一見して識素祐刊本の後修と思われる一四行本であり、雙鑑楼本は博増湘京は、計画、大学を表示といる。

してできあがったということである。ものがある。百納本の新唐書は、実に五本以上の宋刊本を集成ものがある。百納本の新唐書は、実に五本以上の宋刊本を集成四行本の一部にはいわゆる嘉祐刊本とは別本とみざるをえない別できる。ただし、影印本による判断ではあるが、目録など一

原本と対照しうる静嘉堂本を使用の巻に限られるから、そこで修正を施されたらしい箇所がある。いまそれを確認できるのはなお、影印の整版の際であろうが、本文や刻工名などに加筆

1 静嘉堂蔵〔紹興七年〕刊〔南宋前期〕修本

触れる。

ある。 北宋嘉祐でなくて南宋紹興の刊本であることになったが、こ

巻五一二三葉 巻八一一・・二 巻一〇一六 巻二六一一・一三・四 巻二九一二・二四 巻四九上一二 巻五六一五 巻十二十 巻二二十 巻一五 巻二二十 巻二二十 巻二二十 巻二二十 巻二二八下四 巻二〇五 巻二〇六 巻二〇七 巻二一四 巻二二五上下 巻二二六下四 巻二二〇 巻二二十上 巻二二二中 巻二二五上

ら、原本は当初からこの部分を欠き、南宋前期、中期の補刻をの葉であり、補充された一六葉は元代の補刻葉と思われるか訂正している。静嘉堂本の現存の表の部分はすべて紹興の原刻は、欠葉を北京図書館蔵本らしい別本で補い、葉数を加筆して三八葉が脱落し、版心の葉数はそのまま連続している。百納本三八葉が脱落し、版心の葉数はそのまま連続している。百納本紹興刊本は巻七五下(宰相世系表一五下)の第一五~二九・紹興刊本は巻七五下(宰相世系表一五下)の第一五~二九・

めずている。 の葉数の誤りで欠葉はないから、百納本はこれを一葉づつ繰りの葉数の誤りで欠葉はないから、百納本はこれを一葉づつ繰り記入の罫紙を插入して、第三葉以下に続けているが、実は原版訂正は巻一にもあり、静嘉堂本はその第二葉を欠葉のように未経て元代になって、これが改められたかと推定される。葉数の

全巻にわたって相当に詳密に施された李安詩によると思われる朱墨の書入れは、すべて抹消されている。それらは多く本文と界線にかかっていたし、紹興原刻版は板面が磨滅してかなりと外線にかかっていたし、紹興原刻版は板面が磨滅してかなりといわねばならず、字様は多分に原本の味を失っている。しかといわねばならず、字様は多分に原本の味を失っている。しかといわねばならず、字様は多分に原本の味を失っている。しかられ、その一部が巻末の跋やその著の校史随筆に記されているが、先述の巻七五下の欠葉の補訂や、たとえば巻一〇六第一一葉表の末字に「成龍」とあるのを「成就」と訂してあるよう「葉表の末字に「成龍」とあるのを「成就」と訂してあるよう「葉表の末字に「成龍」とあるのを「成就」と訂してあるよう「葉表の末字に「成龍」とあるのを「成就」と訂してあるよう「東表の末字に「成龍」とあるのを「成就」と訂してあると思われるなが、たばないで表演して消したまま忘れのこしたものらみえるのを、修正しようとして消したまま忘れのこしたものらかえるのを、修正しようとして消したまま忘れのこしたものらかえるのを、修正しようとして消したままである。

巻一〇六第一一葉、静憲堂本は南宋前期の補版。足利本の紹興原版は「成就」と正しい。巻八第一一葉、静嘉堂本は紹興原版(刻工章彦)であるが、百納本はと正しい。巻八第一一葉、静嘉堂本は紹興原版(刻工章彦)であるが、百納本は

この本に人を惑わせること甚しいもので、影印本によって欠筆当に変えてしまったところがある。刻工名では、巻三―一二葉の王震は静嘉堂本に王真とあり、巻七―一四の董が李、巻二五の王震は静嘉堂本に王真とあり、巻七―一四の董が李、巻二五の王震は静嘉堂本に王真とあり、巻七―一四の董が李、巻二五の王震は静嘉堂本に王真とあり、巻七―一四の董が本、巻二五の王震は静嘉堂本に王真とあり、巻七―一四の董が本、巻二五の王震は静嘉堂本に王真とあり、巻七―一四の董が本、巻二五の王震は静嘉堂本に王真とあり、巻七―一四の董が本、巻二五の王震は静嘉堂本に王真とあり、巻七―一四の董が本、巻二五の王震は静嘉堂本に王真とあり、巻七―一四の董が本、巻二十四、三葉、大半は原刻版であって、刻工名や大画を不られたものと思われ、四代仁宗の嘉祐刊本が問題である。刻工名や大画を不当に変えてしまったところがある。刻工名では、巻三―一二葉当に変えてしまったところがある。刻工名では、巻三―一二葉当に変えてしまったところがある。刻工名では、巻三―一二葉当に変えていまいた。

を重出させ、百納本はこの行全体を修正したことは前述した。字が重複したのを、梅沢本が前字を墨釘とし、静嘉堂本が両字していない。なお、第五葉裏一○行から一一行にかけて「居」この巻は梅沢記念館にも嘉祐刊本があり、これらの字は欠画

を調査する際の注意を指摘している。

2 北京図書館蔵 [紹興七年] 刊 [南宋前期·中期

元〕逓修木

じであり、版心下象尾に静嘉堂本と同一の刻工名がしばしばあ毎半葉一四行、行二四字内外と、行格はいわゆる嘉祐刊本と同北京図書館蔵本にあたると思われる一四行本は、左右双辺、

之印」の印記がみえ、北京図書館蔵本であったことが確められ 二一首、一〇一首、一七四尾、一七五首に「京師図書館/収蔵 らわれるが、一部に、版心上象尾に字数を刻し、字様や刻工の 一見して後代の修補と思わせる葉も含む。巻一一首、二〇尾

してつぎの六本が著録されている。 北平図書館善本書目(一九三三年刊) 存八巻志一二中下・一四上下 伝一四〇~一四五 には、 宋刻本の唐書と 宋刻本

宋刻元印本

二二五巻 存一三〇巻表一〇下・一四五~一四七 | 一四〇上・一四五~一四七 | 日録 紀一~一〇 志一~三三・三五~三七

宋刻明印本 宋刻明印本

存一三五巻 志一~一四・一九~二七・四七~五〇 - 一〇~~一〇三・一一七~一二二・一二七 - 二三二・一三九~一五〇 宋刻明印本

存九二巻 ~四八・一四〇~一四一・一四二下~一五〇 中九七~ 一〇六・一一七~一二二~一二四~ ・九七~ 一〇六・一一七~一二二~一二四~ 紀一~ 一〇六・一一七~一二二~一二四~ 宋刻明印本

葉はつぎのとおりで、合わせて二六巻余りである。 この北京図書館本で百納本に使用されていると思 われる巻

九―一三葉・巻四九上―二葉・ [巻五六―六葉・巻七一上―一~四・一九・二三 巻九―三葉・巻一〇―六葉・巻一一~二四・巻二六―一一・一三・一四葉・巻二 〔目録上五~一六葉・目録下一~一八葉〕・巻五―一三葉・巻八―一一・一二葉・ ・二四・三一・三二・三四葉〕・巻七五下―一五~二九・三八葉・〔巻八九 ― 七

いると思われるが、その目録には著録されていない。

さて、この北京図書館本は、

現在も北京図書館に収蔵され

六六~一七四・巻一七六~一七九・巻一八一~一八三・巻 | 八九 葉〕・巻九九・巻一○一・巻一○二・〔巻一二一一六〕・巻一五九~一六四・ り、別本と思われるが、北京図書館本に同時に含まれていないとも限らないの ① のものはおなじ一四行ながら目録などは明らかに字様や欠画の状況が異 で、ここにあげた。同じく七一上(表一一上)の一○葉などは、同版かとみえ るが、つぎに掲げる北平図書館善本書目の当該本と思われるものの欠巻部分な

数えると、 これらのうち、第二の宋刻元印本存一三〇巻の存巻を通巻で

ので、「」印を付けた。

~ 一○九·一五六~二一五上·二二○~二二二 目録・巻一~四三・四五~四七・七○下・七四~七五・九二

ら考えるように、元印というのも妥当と思われる。 となり、百納本に使用された部分がほとんどこれに含まれるか ら、この本を影印に用いたものと推定される。のちに刻工名か

ったかはわからない。 ある。これらの諸巻になぜ静嘉堂本、北京図書館本を用いなか 共通する一三巻も含めて、北京図書館本の存在する巻も二三巻 たところには、静嘉堂本の存在する巻が二〇巻もあり、これを ある。ところが、この二本と行格の異る雙鑑楼本をもって補 ろうが、一巻全体に及んでいる巻は、むろん静嘉堂本の欠巻で 堂本が存する巻であり、写真整版の際の都合で插入したのであ 部分的に一葉ないし数葉が用いられた部分は、いずれも静嘉

善本書影収載の建安魏仲立宅刊一〇行本の存二巻一冊とであり、両者が同本であることをものがたる。初行上方の汚れが相り、両者が同本であることをものがたる。初行上方の汚れが相り、両者が同本であることをものがたる。初行上方の汚れが相り、両者が同本であることをものがたる。初行上方の汚れが相り、両者が同本であることをものがたる。初行上方の汚れが相り、両者が同本であることをものがたる。初行上方の汚れが相り、両者が同本であることをものがたる。初行上方の汚れが相り、両者が同本であるだけであり、いずれものちに述べるが、第二、三行下本が著録されるだけであり、いずれもの方に述べるが、第二、一一の首と表情が表している。

工は、静嘉堂本のそれを較べておよそつぎの四項に分類されよこの北京図書館本の百納本に影印された四○巻余にみえる刻ら、同館現蔵かと思われるのである。しており、同館蔵本以外についてはその所在を明記しているかしており、同館蔵本以外についてはその所在を明記しているかり収別図録は、その大半を北京図書館所蔵本から採ったと

る。

I 紹興刻工と同じもの

3. 4 王大介 王成 王昌 5 史復 7 呉諧 11章中 章彦

Ⅱ 南宋前期刻工と同じもの

10徐用 11章字 章容 13董昕 董暉 董暘 4王祚 6朱明 7呂昕 李崧 9施珣 施沢 胡寔

Ⅲ そのほかで上象尾に字数のないもの

陳英 高彦 11張栄 陳紹先 沈諒 呉祐 8周彦 張説 金祖 章宗 李益 12 童 昕 9洪茂 5 包端 陳仁 沈定 李玉三 13 賈祚 10徐高 6朱宥 陳用 李伸 李忠

Ⅳ 上象尾に字数のあるもの

前期〕修本と同版であり、ⅢⅣによってその元代にいたる逓修 本であることが明らかであろう。Iの残存はきわめて少く、二 ⅡⅡによってこれが静嘉堂本、すなわち〔紹興七年〕刊〔南宋 14趙良 5占譲 3 子成 金震 9 彦徳 11張成 趙周 沈貴 可川 子英 4 太亨 趙明 張亨 平山 谷仲 茂実 8 周 山 10孫琦 6朱大存 趙秀 許成 文明 15 鄭埜 許彦明 袁子寧 周明 朱仁 王正 17応子華 陳文 徐永 林茂叔 王昌 朱長二 7李益 12雇恭 青之 王明

には受けとれないので、版心上象尾の大小字数の刻の有無によこの影印本は加筆修正が多くて字様、刻工名ともにそのまま

刻図録ではこれが混同されたものと憶測される。

滅汚損してきて、両者の区別がつけにくくなっていて、中国版

葉もⅡのそれに近い時期の補刻の葉も、

おそらく同じように磨

六巻余のうちに一○数葉しか認められない。原本は、この原刻

くようである。

雙辺。 十六字不等。小字行三十二字、三十三字不等。白口、左右 上六字不等。小字行三十二字、三十三字不等。白口、左右 区高二〇、九厘米、広一四厘米。十四行、行二十三字至二

第一期 南宋初葉浙中良工と形態を示したあと、巻中の刻工をつぎの三期に分けている。

第二期,南宋中葉杭州地区補版工人章。 董暉李、陶、徐高、等董师、李、陶、徐高、等董易、 虞集、董、昕、章中、施蹇、章字、包端、朱宥、章容

恭 宋琚 金祖 呉志 陳寿 虞裕 曹冠英 虞世栄

召亨等

第三期

元代杭州補版工人

る。 数人とともに、また越刊八行本の礼記正義などにあらわれるか みてよかろう。ともかく、この第一期はⅠⅡに分つべきであ ら、中期にかけて活躍したかと思われるものの、この期の人と るが、天理図書館蔵の通典に王政・周彦・徐高・陳仁・潘亨ら **淮江東転運司三史の漢書にみえて、いずれも南宋前期の補刻刻** 章容・董暉がそれからさほど隔たらない南宋前期の刻工である 工とみなしうる。包端の名は嘉定三年跋刊の中興館閣録にもあ 高は前述のとおり、施寔はいわゆる淳熙刊の史記に、李詢も両 詢・徐高は静嘉堂本の補版にはあらわれなかったが、朱宥と徐 ことは、すでに静嘉堂本に明らかであった。施寔・朱宥・李 すなわち董昜・虞集・章中・章彦は紹興原刻の、董昕・章宇・ 期については、紹興とつぎの南宋前期の両者を混同している。 中国版刻図録の刻工の分類はかなり正確であるが、この第 徐艾山 鄭埜 雇恭 応子華 任阿伴 徐愛山 蔣仙老等

端・呉志・邵亨がおり、呉志はまた嘉定五年(一二一二)刊の二)の礼記正義(八行本・足利学校潰蹟図書館蔵)に王恭・包れる刻工である。刊年の明らかなものには、紹熙三年(一一九れも敦・郭の両字を欠画する南宋中期の刊本にしばしばあらわま二期では百納本には金祖と陳寿しかみあたらないが、いず第二期では百納本には金祖と陳寿しかみあたらないが、いず

ってみられるのである。繁に登場する刻工であり、他のものもほとんどこの二人と組合繁に登場する刻工であり、他のものもほとんどこの二人と組合録)にもいるという。宋琚と呉志はこの期の諸書にもっとも頻義(中国版刻図録)に、邵亨は嘉定一二年刊の渭南文集(同図歴代故事(静嘉堂蔵)や慶元六年(一二○○)刊の春秋左伝正

その他のものも元版に珍しくない。 人と子華とあって姓を欠く刻工とが文献通考にいる。徐艾山ら人と子華とあって姓を欠く刻工とが文献通考にいる。徐艾山ら第三期も百納本と共通するのは鄭埜と雇恭であるが、この二

期・元中期の逓修本と認めて誤りないと思われる。以上によって、この唐書は紹興七年ごろ刊、南宋前期・同中

3 〔南宋中期〕建安魏仲立宅刊本

ない。
第三節で述べたとおり、巻六八・六九(方鎮表七・八)の二第三節で述べたとおり、巻六八・六九(方鎮表七・八)の二第に許別で述べたとおり、それに、一葉であることと同じ大きさに縮印されたためと大いに異るが、表であることと同じ大きさに縮印されたためと大いに異るが、表であることと同じ大きさに縮印されたためと大いに異るが、表であることと同じ大きとにいわゆる嘉祐刊本をが、巻六九末にあるはずの「蘇斎」即がみえなくて確認できるが、巻六九末にあるはずの「蘇斎」即がみえなくて確認できるが、巻六九末にあるはずの「蘇斎」即がみえなくて確認できる。

いので、判断の材料はない。

* 〔南宋中期 建安〕刊一四行本

五字内外、版心白口、単魚尾、字数なしと、目録下の首題など葉、巻八九第七葉、巻一二一第六葉は、左右双辺、一四行、二上第五~一六葉、下第一~一八葉、巻二一第六葉、巻五六第六上の書館本の中に〔〕をつけて含めたもののうち、目録

なお、百納本新唐書の張元済氏の跋文には、静嘉堂本の欠巻を北京図書館本と雙鑑楼本で補って、これと別本であることもた分は一四行本であり、嘉業堂旧蔵・中央図書館現蔵の建安魏仲登六八・六九はたしかに建刊一○行本であるが、目録の補配部安魏仲立宅刊本を配して、全巻が宋刊本で整えられたという。立宅刊本は目録も一○行であって、これと別本であることもたかである。

雙鑑楼旧蔵〔南宋前期 建安〕刊一六行本

5

書館に蔵せられ、北京図書館善本書目に
書館に蔵せられ、北京図書館善本書目に
書館に蔵せられ、北京図書館・書目に
書館に蔵せられ、北京図書館・書目に

存一百二十四卷加下至二百二十五年二百二十二中(1百二十五卷十四、二百十二至二百十三配明刻本)(傳增和歐唐書二百二十五卷十四、二百十二至二百十三配明刻本)(傳增和歐唐書二百二十五卷十四、二百十二至二百六

存一二〇巻の列伝部分だけの残本である。と著録されている。すなわち、列伝二二以下、明刊本を除くと

に、つぎに掲げる「北宋小字本唐書跋」であろう。 博増湘の跋とは、おそらく蔵園群書題記続集巻一に収載され

> 本通鑑、 之歳月、肆力丹鉛、一償此願乎。丁丑六月初十日、清泉逸 同、可以正殿本之失者、凡六事。若尽発此百許卷,詳為勘 會取此本、与武英殿本対校。歷挙周処封倫等伝、文字不 字合璧本、伝播於世宇、亦書林中一快事也。菊翁付印時 就此中摂取三十六巻、以弥其欠。於是北宋刻唐書、遂有小 足。適余在滬肆収得此書、挽張菊翁前輩代為諧価。 書、摹影以帰。而陸書頗有欠巻、以北平館本補之。仍苦不 楼彙印百衲本廿四史、以唐書難得古槧、 識於蔵園之萊娯室。 其獲当何如耶。戦禍将発、憂心如焚。何時仮我以優閑 江南館所蔵晋書、其密行細楷、 其小字十五六行者、 与此正同。 亦類此。近歳涵芬 因仮静嘉堂之陸氏 他如日本官庫所蔵 菊翁因

職、抑明代 有翻本、取以補入耶。疑莫能明也。沅叔又迹方板、刻工疏率、神気索然、決非原刻。豈宋末坊肆覆迹方板、刻工疏率、神気索然、決非原刻。豈宋末坊肆覆人、竢博攷之。又第八十八・九、一百三十七・八各巻字人、竢博攷之。又第八十八・九、一百三十七・八各巻字人、竢博攷之。別有繁玉玄居宝刻一印、未讓何蔵印有欧陽玄印、宋景濂印、万巻堂印、及宋蘭揮諸印、蔵印有欧陽玄印、宋景濂印、万巻堂印、及宋蘭揮諸印、

巻についても、ふんだんにこの雙鑑楼本を用いている。すなわ本新唐書跋)、百納本には静嘉堂本、北京図書館本の現存するずかに二行四、五字多いだけとその相近いことを喜んで(百納が、傅氏はこれを北宋本と信じ、張元済氏また静嘉堂本よりわか、傅氏はこれを北宋本と信じ、張元済氏また静嘉堂本よりわ

こすぎない。 ざるをえないのは巻一三一~一三六(列伝五六~六一)の六巻ざるをえないのは巻一三一~一三六(列伝五六~六一)の六巻北京図書館本は二三巻あり、両本がともに欠けてこの本によらち百納本に使用の三六巻のうち静嘉堂本の存するもの二○巻、

左右双辺、一六行、二九字、白口と傅跋に明らかであるが、 を字が数例みらけられるものである。 を字が数例みらけられるものである。 を字が数例みらけられるものである。

書)、遵勁有力(晋書)と称せられるが、後漢書に銭塘王叔辺書、遵勁有力(晋書)と称せられるが、後漢書に銭塘王叔辺は似たものは少くない。たとえば中国版刻図録をみれば、いずに似たものは少くない。たとえば中国版刻図録をみれば、いずに似たものは少くない。たとえば中国版刻図録をみれば、いずに似たものは少くない。たとえば中国版刻図録をみれば、いずに似たものは少くない。たとえば中国版刻図録をみれば、いずに似たものは少くない。たとえば中国版刻図録をみれば、いずに似たものは少くない。たとえば中国版刻図録をみれば、いずに似たものは少くない。この欠画とともに、秀勁にして筆傳氏が北宋本としたのは、この欠画とともに、秀勁にして筆傳氏が北宋本としたのは、この欠画とともに、秀勁にして筆書)、遵勁有力(晋書)と称せられるが、後漢書に銭塘王叔辺

「東陽大学人文科学研究所蔵の後漢書一二○巻二○冊(有欠) 京都大学人文科学研究所蔵の後漢書一二○巻二○冊(有欠) 京都大学人文科学研究所蔵の後漢書一二〇巻二〇冊(有欠) 京都大学人文科学研究所蔵の後漢書一二〇巻二〇冊は、紹興一七年東陽崇川余四十三郎宅/今将 ある。巻頭の初学記序の末に、「東陽崇川余四十三郎宅/今将 ある。巻頭の初学記序の末に、「東陽崇川余四十三郎宅/今将 を本唐書よりやや大字ということになろうが、たしかに字様が似て同 系本とみられる。ただし、各巻ともはじめは字体が整っている が、後半はしだいに粗雑となり、全巻のうちでも後に行くほど だい、後半はしだいに粗雑となり、全巻のうちでも後に行くほど でれがひどく、一見して元刊本を思わせるところもある。

四〇九

もこの期の建刊本であろう。これも、巻一は毎半葉一三行・行

録に用いられたものや、魏仲立宅刊本などの字様に似た異版が 四葉に同じ建安風ながらやや肉太の、唐書でいえば百納本の目 る。そして、巻七四上、 期の建刊本とまったく同系のものである。 欠画も 桓字 に 止ま 約二四字、 を同じくし、字様もかなり似ているが、明らかに別本である。 とは、その書影のある巻一首は、ともに一三行でほとんど行格 おこの後漢書は、中国版刻図録図版一六〇の後漢書王叔辺刊本 插入されていて、これは南宋中期以後の補版かと思われる。 の調子は全巻を通じていて、中国版刻図録所掲の一連の南宋前 に巻中の所々に一五行・約二七字の葉があり、巻の末葉には 一行・一八字、一二行・二〇字のところもある。ただし、 以上のようなわけで、雙鑑楼本の唐書は、百納本二十四史の 巻二以下が一四行・約二六字と行款を異にし、 八七(列伝六四上・七七)の各第三・ さら

/玄居/宝刻」等の諸印がみえる。「緯蕭/草堂書記」「宋筠」「蘭揮」、「萬巻堂/図籍章」、「紫玉推定される。なお、傅跋のとおり、「雪苑宋氏蘭/揮蔵書記」

な北宋本ではあるまいが、南宋初<中期の建安刊本であろうと

影印本によるだけで原本を実見していないが、傅氏のいうよう

ある。江南図書館善本書目(清宣統中刊)、江蘇省立国学図書葉、版匡営造尺六寸・寛八寸四分(一八・二×一三・五ギ)」と鐘」「関源/真賞」の印がみえる。解題に、「全書一千六百七十一六四(列伝八九)首葉の書影が掲載されていて、「汪印/士盋山書影(民国一八年南京国学図書館刊)にこれと同版の巻盋山書影(民国一八年南京国学図書館刊)にこれと同版の巻

京本のではむしろつぎに述べる南京図書館現蔵本に近ながら、これではむしろつぎに述べる南京図書館現蔵本に近ながら、これではむしろつぎに述べる南京図書館現蔵本に近ながら、これではむしろつぎに述べる南京図書館現蔵本に近れまで、これではむしろつぎに述べる南京図書館現蔵本に、唐書二百二十五巻館図書総目(民国二四・二五年刊)巻九に、唐書二百二十五巻館図書総目(民国二四・二五年刊)巻九に、唐書二百二十五巻館図書総目(民国二四・二五年刊)巻九に、唐書二百二十五巻館図書総目(民国二四・二五年刊)巻九に、唐書二百二十五巻のである。

字本二百五十巻であり、丁氏の八千巻楼書目に「新唐書 二百ら、これが汪氏の藝芸書舎宋元本書目の宋版書目の 新唐書 小国学図書館がみずから盋山書影を編して丁志を引くのであるかは存在しないはずで、いささか矛盾と誤謬がめだつ。江蘇省立公亮の銜名を冠するというのも、進書表と目録が失われていてとあるものである。丁志のこの前の部分に記された、巻首に曾とあるものである。丁志のこの前の部分に記された、巻首に曾

誤解していることになるが、盋山書影の解題もいささか不明確あるまい。とすると、つぎの一四行本の中国版刻図録の解説も時の江南図書館に収められた諸書の一であることにはまちがい二十五巻 北宋刊本」と著録されるもので、丁氏の書屋から当

解説の全文はつぎのとおりである。 中国版刻図録図版一六六所掲のもので、南京図書館蔵、その中国版刻図録図版一六六所掲のもので、南京図書館蔵、その

書室蔵書志謂此書為北宋嘉祐刻本、絶非事実。 風格。宋諱欠筆至貞字、知拠北宋嘉祐監本翻版。丁氏善本 風格。宋諱欠筆至貞字、知拠北宋嘉祐監本翻版。丁氏善本 八法与晋書、周易注、初学記等書相似、純係南宋初年建本 注文雙行、行二十九字。白口、左右雙辺。字体娟秀、版式 注文雙行、行二十四字。

が、字詰は異っており、いわゆる嘉祐刊本と覆刻の関係にはなが、字詰は異っており、いわゆる嘉祐刊本と覆刻の関係にはない、字で、行格が同じか近いだけに、同図録所載のそのほかの南宋前期建安刊の諸本や、京都大学人文科学研究所の後というのは雙鑑楼本の傳跋と共通するが、一六行の雙鑑に似るというのは雙鑑楼本の傳跋と共通するが、一六行の雙鑑に似るというのは雙鑑楼本の傳跋と共通するが、一六行の雙鑑に似るというのは雙鑑楼本の傳跋と共通するが、一六行の雙鑑に似るというのは雙鑑楼本の傳跋と共通するが、一六行の雙鑑に似るというのは雙鑑楼本の傳跋と共通するが、一六行の雙鑑に似るというのは

V

丁氏善本書室蔵書志云々というところをみると、これが南京工氏善本書室蔵書志云々というところをみると、これが南京ないが、雙鑑楼本に関連して付言した。

図書館に南宋前期・同中期・元逓修本がある。と梅沢記念館に原刻本が、静嘉堂文庫に南宋前期修本が、北京ったということである。この紹興刊本は、足利学校遺蹟図書館原刊本とされてきた唐書が、実は南宋紹興七年ごろの刊本であ以上 縷々 述べてきたが、要するに、かねて北宋嘉祐五年の以上 縷々 述べてきたが、要するに、かねて北宋嘉祐五年の

本の存在が予想される。 宋刊新唐書にはほかに建安坊刻と思われるものが三種あった行本が予想される。 さらに未確認ながら、南宋中期刊一四行元代の覆刻本がある。さらに未確認ながら、南宋中期魏仲立宅刊蔵)の、同じく一四行本が南京図書館の、南宋中期魏仲立宅刊蔵(大のでは、本の存在が予想される。 さらに未確認ながら、南宋中期魏仲立宅刊蔵)の、同じく一四行本が南京図書館の、南宋中期魏仲立宅刊蔵)の、同じく一四行本が南京図書館(雙鑑楼旧で、南宋前期刊と推定される。

は注意を要する場合がある。

「日納本二十四史の新唐書は、静嘉堂文庫蔵の紹興刊南宋前期百納本二十四史の新唐書は、静嘉堂文庫蔵の紹興刊南宋前期

註

史臣考に詳細な記述がある。 文史学研究所月刊二―五・一九三四年)の一 修撰考、二、以上については、羅香林・唐書源流考上(国立中山大学

: : <u>--</u>

所蔵らしく、その善本書目(中華書局・一九五九)巻五に(3) 景徳伝燈録は四部叢刊三編子部に影印されたもので、常学校遺蹟図書館後援会・一九七三年)。

配朱紹興四年积思鑒刻本《巻二至三配清抄本》 十冊宋釈道原撰 宋刻本〔巻一、西来年表配另一朱刻本《巻十至十二景徳(伝)燈録三十一巻西来(年表一)巻

ここには四種以上の諸本が取合わされて錯綜するので、するからである。とあるものがこれであろう。別本補配、補写の巻次が一致とあるものがこれであろう。別本補配、補写の巻次が一致

民草は巻五~九のわずか一三葉だけで、章中ら四人は 長莫は巻五~九のわずか一三葉だけで、章中ら四人は 長莫に準ずるかにみえる。しかし、徐義の名は後に述 ないが、巻一三以降のほぼ後半に偏在し、全巻に遍く ないが、巻一三以降のほぼ後半に偏在し、全巻に遍く ならわれる四人の量にははるかに及ばないし、字様から も呉莫に準ずるかにみえる。しかし、徐義の名は後に述 でる思溪円覚蔵経の刻工のなかにあらわれるので、章中 でる思溪円覚蔵経の刻工のなかにあらわれるので、章中 でる思溪円覚蔵経の刻工のなかにあらわれるので、章中 でる思溪円覚蔵経の刻工のなかにあらわれるので、章中 をと同時代の者と考えざるをえない。

心が白口であるものの、版心は相違して「伝第一」と題が、これも一三行、二三~二四字(年表は二 八行)、版序、西来年表、巻一は另一宋刻本ということである

写も、この本に拠って行なわれたと思われる。の関係にはあるまいと推定される。巻二・三の清代の補が、つぎの元刊本から考えられるように、宋刻本と覆刻して樹字は欠いていない。おそらく宋刊の別本であろうし、双魚尾、字数と刻工名が入っておらず、貞字は欠画し、双魚尾、字数と刻工名が入っておらず、貞字は欠画

る。これは大東急記念文庫に所蔵のが入り、一葉だけだが下象尾に「子寧刊」と刻工名があい三行・二三字であるが、版心が線黒口、上象尾に字数一三行・二三字であるが、版心が線黒口、上象尾に字数の元版は、やはり

至正乙巳比丘宝募縁/刊於太白山祗桓庵流通至正乙巳比丘宝生募縁重刊/板留太白名山祇桓精舎流通

の補写もこの期に行なわれている。 の補写もこの期に行なわれている。 の対工名とも合致する。大東急記念文庫本は、左右などの刻工名とも合致する。大東急記念文庫本は、左右などの刻工名とも合致する。大東急記念文庫本は、左右の双行木記をもつ、すなわち元至正二五年(一三六五)の双行木記をもつ、すなわち元至正二五年(一三六五)の双行木記をもつ、すなわち元至正二五年(一三六五)の双行木記をもつ、すなわち元至正二五年(一三六五)の

菴刊本の存在が知られているが、国立中央図書館金元本である。なお、元版では延祐三年(一三一六)湖州幽禅表・巻一、そして清抄の巻二・三とほとんど一致するの宋刻本とは行格を同じくせず、另一宋刻本の序・西来年ところでこの元至正刊本は、四部叢刊本の主体をなすところでこの元至正刊本は、四部叢刊本の主体をなす

ねていったのではないかと推測される。 祐刊本が中間に位置して、另一宋刻本の系統が覆刻を重口で字数、刻工名が記され、双魚尾がみえる。この元延分、寛一五・八公分、一三行・二三~二六字、版心線黒図録(図一二五)によれば、左右双辺、板 匡 高二 二公

われない。 する証拠はなく、この四人も北宋刊本の刻工としてはあら う。しかし、この宋刻本を一一世紀中葉の嘉祐ごろの刊と 刻補刻の関係に相当するのであるから、むしろ当然であろ も宋刻本の方が古く感じられる。それは静嘉堂本唐書の原 てい定かなことはいえないが、一見したところでは、字様 りやや進んで、署・樹・豎に及んでいる。影印本からとう 刻工と同世代ということになる。欠画は一三行の宋刻本よ ある。これは、後に詳述するが、唐書の静嘉堂本の補刻の 名があり、そのなかの孫彦は紹興刊の両淮転運司本の漢書 宋紹興四年釈思鑒刻本とされているが、やや小字で毎半葉 一五行、毎行二七~二八、字版心は白口で、下象尾に刻工 (静嘉堂蔵本)、後漢書(百納本影印本)にもみえる名で 巻一〇~一二に補配の三巻は、北京図書館善本書目では なお、 一五行本の刻工名を列挙しておく。

本というのは、同年の劉棐の景徳伝燈録後序に、北京図書館善本書目がこの一五行本を紹興四年釈思鑒刊 | 孫彦 張学 陳才 陳亢 陳文 蔡忠 蔡政 | 丁拱 毛昌 | 方祥 | 方祐 | 王進 | 洪昌 | 洪悦 | 施端

伝燈録鏤行旧矣。兵興以来、其版灰飛。慕心宗者、 僧思鑒婺人也。……広募浄信、 復鏤其板。

…台之寧海邑民周氏嘆曰、吾地有大梨木、 ……当刊此録耶。 遂捨以桄版、且邀鑒即其家、僦工而 閲三世矣。

とあることによるものと思われる。四部叢刊本にはこの後

う。この一五行本は刻工からも南宋前期の刊本であること 序がないが、北京図書館善本書目にはこの版本が三本著録 五行本にあるとしても必ずしもこのときの 刊と は限らな には疑いがないが、後序は元版にも付刻されているし、一 三○を備えているから、これに付刻されているのであろ されていて、そのうちの一本が清抄本三巻を含む完本で巻

本としてよりふさわしいであろうことが、以下の新唐書の 本の方が、実は北宋嘉祐年間の刻ではなくて、紹興四年刊 い。むしろ、章中ら四人の刻工によって主に雕られた宋刻

 $\frac{2}{4}$ 外台秘要方四〇巻 唐李寿撰

考察を通じて明らかにされるはずである。

台方幾 每行二三궽二四字、 注文小字双行三○字。 版心自口、「外 左右双辺(二〇·一×二三·六ボ)、有界、毎半葉一三行、 (葉数) (刻工名)」。補刻は全くなく、 〔南宋前期〕刊 江°弓 通 成 4方彦成 四二冊 王介 静嘉堂文庫蔵 刻工は 王安

7 余全

徐政 8周皓 徐杲 呉 邵 徐昇 林俊 9 兪昌 徐彦 徐高 10徐侃 徐顔

陳浩 時明 11 婁謹 12黄季常 13楊広 張永 章楷 葉邦 葉明 陳文 陳茂

べき文字が少く、もっとも降るのが完字で、構字はみあた 欠画はかなり厳格であるが、 董* 昕 14趙宗 15楼謹 医書という性格から避諱す 鄭英 17応権

らず、慎字は頻出するが全く欠いていない。巻一・九・一 七・二三末に

右迪功郎充両浙東路提举茶塩司韓辦公事張寔校勘 右従事郎充両浙東路提挙茶塩司韓辦公事趙子孟校勘 と校正の、各巻末に左のいずれか一行の校勘の銜名が

あ

朝奉郎提挙薬局兼太医令医学博士臣裴宗元校正

る。

しているように(図七五・七六、解題二〇㍍-)、紹興 九年 行」の富弼らの官銜がある。しかし、中国版刻図録も指摘 寧二年 (一〇六九) 五月二日准 巻末には皇祐三年(一〇五一)の校対進呈の上言と「熙 中書劄子奉/聖旨鏤版施

要方と同じ刻工があわせて九人以上もいるところから、ま 紹興府刊の毛詩正義(杏雨書屋蔵、影印本・東方文化叢書 た慎字を避けないことから、南宋前期、おそらくは紹興年 八)、それに同年臨安府刊の 漢官儀と 文粋に、 この外台秘

問題こなる。書に原刻、補刻とも同名の刻工が各三人いることが大きな書に原刻、補刻とも同名の刻工が各三人いることが大きな間の官刊本であろうと思われる。そうであるとすると、唐

で、他は明抄本三〇巻、清抄本二巻となっている。中央図冊、そのうち宋紹興両浙東路茶塩司刻本は巻二~六の五巻書目によれば、巻二一~二三・三三の四巻を欠き、三十六書によれば、巻二一~二三・二三の四巻を欠き、三十六書によれば、巻二一~二三・二三の四巻を欠き、三十六十二、その方書陵部に同版の残本一一巻一一冊があるなお、宮内庁書陵部に同版の残本一一巻一一冊がある

宮内庁書陵部蔵本の巻末に右迪功郎明州司法参軍兼監盧(5) 文選六〇巻 五臣幷李善注 〔南宋初期〕明州刊(5) 文選六〇巻 五臣幷李善注 〔南宋初期〕明州刊書館(北平)にも巻一・二の二巻二冊を蔵する。

欽の紹興二八年の補刊記があるが、すべて原刻の足利本に

張謹 郭正 郭政 陳迎 陳然 9 兪忠 施章 施瑞 洪先 洪茂

·弥 董明 15劉仲 劉信 蔡至道 16駱昇 大 黄暉 黄覚 13葉明 葉達 甍珍

駱晟

九華に与えられた本である。 重印、北条氏の虎印が捺され、北条氏政から第九代庠主の しつかえない。欠画は構・觀字まで行われている。金沢文 紹興中刊本であって、南宋初期に活躍した人たちとみてさ で、この本はかねて紹煕ごろの補修があるといわれたが、

(6) いわゆる眉山七史は、三朝本と称されるように、補修を受けつつ明代まで板木が残存したために、 伝本 は少くない。しかし、原刻葉をある程度残し、その刻工名を確認でり、その多くが百納本二十四史の各史の影印に用いられている。なお、以下の解題のなかで、刊修の時期の推定を、いる。なお、以下の解題のなかで、刊修の時期の推定を、いる。なお、以下の解題のなかで、刊修の時期の推定を、南宋だけは三期に分つが、元代は細分しなかった。ここで南策だけは三期に分つが、元代は細分しなかった。ここでは、本修をといる。

(葉枚) (列口引)、PA女に真思な可しない。 毎行一八字。版心、宋版は線黒口、「宋書紀(志・伝)幾左右双辺(二二・六×一七・三ギ)、有界、毎半葉九行、左右双辺(二二・六×一七・三ギ)、有界、毎半葉九行、来書一〇〇巻 梁沈約撰 〔南宋前期〕刊〔南宋中宋書一〇〇巻 梁沈約撰

(葉数) (刻工名)」、字数と魚尾を刻しない。

巻一~五・一一~一三・一五~七四の六八巻四○冊は

四 五

を数えるだけである。 るものは、これと同版の次掲本とあわせて、つぎの一五人 も原刻葉はわずかしか残っておらず、その刻工と推定され 刊記をもつ葉を含む、明代にいたる逓修本である。前者に 思われる善本であり、他は弘治四年、嘉靖七←一○年の補 毎冊首尾に明の「礼部官書」の大型印を捺し、元修元印と

4王友 王志 王廷 史忠 5 田 召 王庚 6朱通 王昌 王。 祖

掲本などをもって補っている。 堂旧蔵。百納本二十四史の宋書はこの元修本を主とし、次 欠画は原刻葉では桓字まで行われている。 吳興劉氏嘉業

宋書残本(存巻四~一二・一四~二四・二七・二八・

刊 [同中期~元]逓修 三一冊 七九・八二・九三~九六 三〇・三一・三九・四一~四八・五二~六五・七五 計五八巻) 中央図書館(北平)蔵 〔南宋前期〕

であろう。 毎冊首に「晋府/書画/之印」、尾に「義真/ 前掲本のうちの「礼部官書」印のある本と同版

王昇

王能

王祖

王華

堂図/書印」がある。

梁書残本(存巻一~六・一一~二一・二六~四一・ 六~四八・五一~五四 〔南宋前期〕刊〔南宋中期~元〕逓修 計四〇巻) 唐姚思廉撰 四

中央図書館(北平)蔵

4王千 王昌 王。 祖 王才 王欽 王生 王堪 王志 5田力 王廷 王昇

版心も宋書に同じ。原刻刻工はなお問題があるが、

左右双辺(二一·八×一七·五ギ)、

九行・一八

任達 田永 6朱太 任顕 7余恭 朱右 朱言 余貴 11張林 朱通

がそうであると思われ、その欠画は慎字に及んでいる。 納本に使用。 陳書三六巻 唐姚思廉撰 〔南宋前期〕刊 百

〔南宋中期~元〕 逓修

一六冊

静嘉堂文庫蔵

張善

13楊丈

楊和

明初に及んだことを示すが、それらの詳細は後考に俟つと 元代にも数回にわたって補修を重ねたか、あるいはそれが は宋書などと同じ。原刻葉の残存は後掲の三本より少く、 左右双辺(二一・九×一七・五ギ)、九行・一八字、版心

して、ここには四本を含めての原刻刻工名をあげる。 4王才 王。王 昌 丙 王生 。 王 . 王利和 王廷

5田力 朱言 朱通 田立 張禹 13楊和 任欽 田永 張善 7余貴 15潘正 陳立 史忠 6朱太 呉明 12程昇 10 袁明

欠画は慎字に及ぶ。百納本には、たぶん首尾完好という

ている。すなわち、百納本の陳書には現存の原刻葉がほぼ た原刻葉が存するところは、ほとんどその宋版に差しかえ のうちの前二本をもしばしば用い、とくにこの本に失われ 晋府図書や京師図書館の印が数箇所にみえるように、次掲 網羅されているといってよい。 ことでこの静嘉堂本が底本とされたことになっているが、

陳書残本(存巻一~五・六・八~一〇・一七~二二・ 二四~三六 計二五巻)

陳書零本(存巻一七~二一・三一~三三計八巻)二冊 陳書零本(存巻五・七・八~一〇 計五巻) — M

〔南宋前期〕刊〔南宋中期~元〕逓修 中央図書館(北平)蔵

存がやや多い。 前二本は粘葉装、後は包背装。静嘉堂本より原刻葉の残

北斉書残本(存巻三五~五〇 計一六巻) 唐李百薬 〔南宋前期〕刊〔南宋中期~元〕 逓修 五冊

中央図書館(北平)蔵

毎行一八字。 版心は宋書等と同じく、 線黒口、「北斉列伝 左右双辺(二三·一×一七·四ギ)、有界、毎半葉九行、 (葉数) (刻工名)」と題する。原刻刻工は

3下開 王昌 4王才 王能 。 王 太 王祖 7余貴 王華 王世華 王生 9 洪新 5田力 10 袁民

15潘正

であり、その欠画は慎字に至る。「橋氏/家蔵」、「京師図

書/館収蔵之印」印

百納本二十四史の北斉書の一部に、全巻が用いられてい

魏書一一四巻(欠巻四〇~五九 存九四巻) 〔南宋初期〕刊〔南宋中期~元末期〕 逓修 北斉魏

の磨滅が著しいわりに、かなり残っている。 毎行一八字。版心線黒口、一部に白口もある。原刻葉は版 左右双辺(二二·四×一七·七ギ)。有界、毎半葉九行、 六〇冊 中央図書館蔵

3 万六 4王川 王才 王大方 王亢 王°王 真 升

6朱言 壬有 王冲 朱通 史志 史忠 任已 王唐 5 田下 任玉真 王信 任亨 田召 王道 王能 任宗 田永 王賔

11張仁 任欽 13 楊和 宋全 宋彦 陳立 12単亨 10 麦民

が原刻の刻工であろう。欠画は構・慎まで。補刻はほとん たい。呉興劉氏嘉業堂旧蔵。百納本の魏書は北京図書館 ど明初には及んでいないと思われるが、あらためて精査し

業堂蔵書記」印が二○箇所にみえる。たとされるが、この本の毎冊首に捺された「呉興劉氏嘉/江安傅氏雙鑑楼、嘉業堂、涵芬楼の各蔵本を集めて影印し

三八~一一六 計九九巻) 漢司馬遷撰 劉宋裴駅(7) 史記残本(存巻八~一五・一八~二六・二八~三〇・

集解 唐司馬貞索隠

〔南宋淳熙三年〕刊 [同八年

(一一七六)の張杆の原刊の跋があるが、いずれも補写で及んでいる。首に淳煕八年の耿秉の補修の、尾に同三年は白口、「史記幾 (葉数)(刻工名)」。その欠画は慎字には白口、「史記幾 (葉数)(刻工名)」。その欠画は慎字には白口、「史記幾 (葉数)(刻工名)」。その欠画は慎字には白口、「史記幾 (葉数)、有界、毎半葉一二行、左右双辺(一九・一×一三・九ギン)、有界、毎半葉一二行、左右双辺(一九・一×一)、有界、毎半葉一二行、左右双辺(一七六)の張杆の原刊の跋があるが、いずれも補写では白口では、「四冊

静嘉堂本ではこの区別はしがたいから、左に掲げる刻工名刻本で、同八年の補刻も入っていないという。後修を経たいないと思われる。ただし、北京図書館本は淳熙三年の原のところであるが、これと比較して同版とみなしてまちが存六三巻の書影(目録首・巻七首各半葉)はちょうど欠巻

○所掲の楊氏海源閣四経四史之斎旧蔵・北京図書館現蔵の黄丕烈の筆になるという。中国版刻図録図版一二九・一三

李元 李良 李珍 李師順 李益 李祐4王中 王椿 5丘文 丘臻 包彦 6朱宥

はこの両者を含めたものである。

章*郎 宇 松 施昌 胡* 寔 李証 高秀 8周彦 10師順 高俊 施珎 高彦 徐忠 施宴 昌彦 9施中 11張明 徐立 徐栄

陳説 陸椿 13董暉 15劉文 劉彦中章字 章林 章琢 章梓 章椿

中国版刻図録(図版九・一〇、解題八・九%~)に、「匡高四二冊 北京図書館蔵 北京図書館蔵 おり 文粋一〇〇巻 宋姚鉉撰 南宋紹興九年臨安府刊

皆顧広圻抄補。黄氏士礼居旧蔵、百宋一廛賦著録。」とあた、皆紹興初年杭州地区良工。字体古樸、無一補版。欠葉成・銭皐・董明・王受・王因・蔡通・朱祥・阮于・徐真等成・銭皐・董明・王受・王因・蔡通・朱祥・阮于・徐真等東然・牛実・沈紹・朱礼・何全・胡杏・弓成・王允成・王東九年臨安府開雕、校勘官・監雕官銜名十一行。刻工呉邵・興九年臨安府開雕、校勘官・監雕官銜名十一行。刻工呉邵・田子不明・出入、東京、

額例も少くないと予想され、このように両者が共存するこれで二名、また唐書補版の刻工も董明・蔡通と二名の他に

巻四二冊中のごく一部にしかすぎまいと思われるから、このうち、七行を収める)。 ここに挙げられた刻工は 一〇〇るのによる。図版は巻六首半葉と巻末表半葉(官銜一一行

両淮江東転運司三史は、宋の洪邁の容斎続筆巻一四に、とに注目を要する。

9

欽宗諱並小書四字曰渕聖御名。 (周蜀九経)紹興中、分命両雅江東転運司刻三史板。其両漢書內凡

とあって、宝礼堂宋本書録に著録の史記集解に淮南転運司 が欽宗の諱を渕聖御名、高宗のそれを今上御名とするとこ 監雕の官銜があり、これと行格を同じくする漢書、 ものの方が多く、しかもそれには埋木して改められた形跡 える。張元済氏は、百納本二十四史後漢書の跋や校史随筆 刊本としては欠画が慎字に及ぶことがいささか不審ともい であるが、漢書は版心の形式などをやや異にし、また紹興 六字と大字本で字様も堂々としており、欠画も相当に厳格 ろから、これらがこの三史にあたるとされている。九行一 がある。それは完成が隆興乾道年間に及んだことの証左と ないがやや偏ってあり、それより桓、構字の末画を欠いた 漢書・後漢書をみると、渕聖御名、今上御名の例は少くは 較精になされて次の孝宗の代に及んだために、慎字も避け を引いたりして、この刊行事業が紹興末年から着手され、 とはたしかであろう。この三史についても、再考するつも れず、今上を避諱しないとすれば紹熙以後のことにもなる も考えられるが、南宋中期の補刻の際に行われたのかもし たとみているらしい。史記はまだ実見の機会を得ないが、 (後漢書)、あるいは涵芬楼燼余書目で、李心伝の朝野雑記 いまはいずれとも断定しがたい。しかし、いずれにし ここで問題の一二世紀中葉の南宋前期の刊であるこ

りである。

〔南宋前期〕淮南路転運司刊 〔南宋中期~明初〕逓修史記一三○巻 漢司馬遷撰 劉宋裴駰集解

北京図書館蔵

表、巻二六暦書、巻八七李斯列伝、巻九五樊酈滕灌列伝、尾で、刻工名を刻し、字数がない。巻二〇建元以来侯者年字、注文小字双行二〇~二一字。原刻の版心は白口、単魚載するところに従う。左右双辺、毎半葉九行、毎行 一六瀬所氏宝礼堂旧蔵で、宝礼堂宋本書録著録。以下、この記補刻が明初に及ぶとするのは、北京図書館善本書目。南補刻が明初に及ぶとするのは、北京図書館善本書目。南

4仇永 王全 王先文 王祐 王景 王華うになる。

けて収録されているが、その前者は画順にするとつぎのよ辦公事石蒙正監雕」の二行がある。刻工名は原・補刻に分充無為軍軍学教授潘旦校対」「右承直郎充淮南路転)運司幹巻一一〇匈奴列伝、巻一二六滑稽列伝の末葉に「左迪功郎

7何通 李秀 王寿 9兪尚 李彦 呉佐 王沢 5丘甸 施光 李恂 呉伸 10孫彦 6仲良 呉迪 汪靖 8 周永 呉煥 仲鑒良 袁佾 袁俊 朱* 明

11張宗

張直

陳麗

戚聰旺

章旼

陳寿

12彭祥

華再興

閔孝中 13楊安

四一九

魏俊 19羅成 21顧玿 顧真 葉石 葉青 14翟栄 趙明 15劉章 劉璋 葉石 葉青 14翟栄 趙明 15劉章 劉璋 楊守道 楊明 楊垓 楊道 楊謹 葉才

大・八~一二・一六・一七・三四~四○・四八~五四・五版」という三○巻(上海図書館善本書目によれば存巻五・中国版刻図録には、上海図書館蔵の「初印精湛、無一補書之□」のほか、王世懋、毛氏汲古閣等のものが多数。とどまらず、慎字にいたっている。蔵印は「南京礼部/公とどまらず、慎字にいたっている。蔵印は「南京礼部/公とどまらず、慎字にいたっている。蔵印は「南京礼部/公下、「大画はかなり多いらしく、構・構・媾・媒・觀・叡字に

等地刻書多同、宋諱欠筆至搆字、間有避慎字者、因推知此「刻工与建康府江南東路転運司本後漢書、以及当塗・宣城雕官の銜名の所在も同じ、刻工名は挙げられていないが、「匡高二二・三厘米、広一七・七厘米」とあり、校対、監六・九九・一○○・一○七~一一○)が著録されていて、

撰 唐顔師古注 〔南宋前期〕刊〔元〕修 八冊七中・二八上・四八・四九 計一五巻〕後漢班固漢書零本(存巻一下・二・六~一二・二一・二四・二

|刻版実由南宋初葉南京地区工人担当。] と書かれている。

く、第七冊(巻二八)、八冊(巻四八・四九)がこれに次第四冊以後の三種以上の取合本。第二、三冊は補刻が多第一冊(巻一・二、粘棄装)、第二・三冊(巻六~一二)、第一冊(巻一・二、粘棄装)、第二・三冊(巻六~一二)、

で、補修は元代のものが多く、これが二回にわたり、南宋中期にもわずかながら行われていたと思われるが、なお精査を要する。ただし、これら各巻は補修の多少にかかわらず、元末か明初の同時の印本と思われる。後掲の静嘉堂本が、同じように補修が巻によって異るのに、すべて明洪武が、同じように補修が巻によって異るのに、すべて明洪武が、同じように補修が巻によって異るのに、すべて明洪武が、同じように補修が巻によって異るのに、すべて明洪武が、同じように補修が巻によって異るのに、すべて明洪武が、同じように補修が巻によって異るのに、すべて明洪武が、同じように補修が巻によって異るのに、すべて明洪武が、同じように補修が巻によって、高列集の行うに対していたと思われるが、なお精中期にもわずかなが多く、これが二回にわたり、南宋中期にもわずかながら行われていたと思われるが、なお精中期にも大きな、高利の前には、これが二回にわたり、南宋では、補修は元代のものが多く、これが二回にわたり、南宋の本が、京本の本を書めてつぎのとおりである。

2 丁璋 10孫昇 5 包 政 周元輔 呉宗 李度 3上官傳 4方中 9 施*周 沈昇 李純 呉興 王永 王恩 王永従 李文 洪先 李昇 李星 徐定 金茂 卓宥 李俊

陳寿 陳庠 梁文 董* 明 董* 暉 陳鎮 陳真 15劉仲 12 恵道 陳従 章忠 崔彦 程恵 陳敏 許茂 13葉克己 陳詢 許源 張显 董昕 陳説 張況

20厳定 厳忠

大画は慎字までで、桓・構の両字も欠き、一方、桓字を 「淵聖」とする場合がある。この二字は埋木をして修正し 「淵聖」とする場合がある。この二字は埋木をして修正した この葉の桓は明らかにそうである。はじめ渕聖御名とした この業の桓は明らかにそうである。はじめ渕聖御名とした であるようにみえ、とくに巻六四下第二六葉、巻六六下第 この主のと想像される。

~七○・七三~七八・八二下~八五・八八 計六○二九・三三~三六・三八~五九・六一~六四・六八後漢書残本(存巻六・九・一○・一六~一八・二一~四冊 静嘉堂文庫蔵

漢書零本 (存巻六四~六七上・六九上中 計五巻)

漢書零巻(存巻六五・有欠葉)

一冊 中央図書館蔵

にたいして、江南東路転運司刊本と推定されている。左右後漢書にも路転運司の刊記・銜名がないが、史記の雅南刊〔南宋中期~元〕逓修 一七冊 静嘉堂文庫蔵巻) 劉宋范曄撰 唐章懐太子賢注 〔南宋前期〕

~一五 計二三巻) 志晋司馬彪撰 梁劉昭注 九冊八一・八二・八六・八七・志一・二・六~九・一三後漢書残本(存巻四~八・五八・五九・七四下~七六・

中央図書館(北平)蔵

平本は印面の汚れがめだち、やや後印であろう。ともに粘葉装。静嘉堂本と補修も同期と思われるが、北後漢書零本(存巻三三) 一冊 天理図書館蔵

逓修(巻一二~一六補写) 四○冊 後漢書一二○巻 〔南宋前期〕刊〔南宋中期~元初〕

上海涵芬楼旧蔵で百納本二十四史の後漢書に影印された北海函券と

えば巻八は全二九葉原刻にたいして北平本は補刻八葉、巻 工は左表のようになる。 巻に補われた北京図書館本は明修本であろう。涵芬楼燼余 部分には補刻が過半に達するものもある。なお、補写の五 は数葉づつにすぎず、これを前掲の三本に較べると、たと 葉のない巻が四○余巻もある善本である。補刻も大半の巻 **書録と前掲三本を参照しつつ、原刻葉を識別するとその刻** 八一は補刻が六対二二という具合であるが、志のはじめの 補修は元初に止まり、原刻のままでまったく補刻

袁 林志遠 李秀 李璋 8卓受 李清 李昇 林芳 周茂 王栄 李芳 林俊 余仲 5丘甸 呉佐 林康 李棠 李彦 6 刑 宣_△ 10孫彦 朱安明

生中

王允成

王永

王永従

王石

右下に△印のあるものは、 章駒 12 程 陳 用_Δ振 華定 陳従 陳用 原刻らしいが例が少くていさ 陳 章 至_△ 坟 陳伸

袁俊

11張宗

章英

さか疑問を残すものである。

涵芬楼燼余書録は龐汝升・宋

10 琚・馬祖ら南宋中期の補刻刻工をも初刻に含めている。 周易注疏一三巻 魏王弼 晋韓康伯注 唐孔穎達疏

京亮藤原憲忠寄進」と墨書されている。欠画は構・媾等の 数)(刻工名)」。 各冊尾に 南宋端平元年・二年の 陸子遹の 每行一九字、注文小字双行。版心白口、「易注疏幾 識語があり、 首の眉上に「足利学校公用」、尾 に「上杉右 左右双辺(二一·七×一五·七ギ)、有 界、 毎半葉八行、 〔南宋前期〕刊 一三冊 足利学校遺蹟図書館蔵

刻のないことで有名であるが、 プ 珪 李棠 李碩 丁璋 10孫中 4毛昌 刻工は 徐亮 王珎 6 朱* 明 徐茂 7李秀

字にいたり、慎字は避けない。いわゆる越刊八行本でも補

11 漢官儀三巻 宋劉攽撰 南宋紹興九年臨安府刊 北京図書館蔵

21顧忠 11張祥

梁文

梁済

許明

中国版刻図録所載。「匡高二四厘米、広一五・七厘米。十

印されており、これによって検すると、刻工は 首半葉と巻末の葉とであるが、続古逸叢書一八に全巻が影 ……」と解題されている(八ギー)。 図版(七・八)は巻上 口、左右雙辺。……巻末有紹興九年三月臨安府雕印一行。 行十七字、十八字不等。注文雙行、行二十二字。白 李石 10 徐真 11陳才 13愈忠 董* 明

13潘俊 20鐘清

を欠く俗字体である。であり、欠画は桓・完字に及び、ただ一字ある溝字は一画

財保護委員会・長滝寺宋版一切経現存目録(一九六六年) 「(13) このいわゆる刻蔵題記は、小野玄妙・仏教経典総論 会年報第三年・一九三八年)、同・思溪円覚禅院と思考(龍谷史壇一九・一九三八年)、川川貫弌・思溪版大蔵経私会年報第三年・一九三八年)、同・思溪円覚禅院と思考(龍谷史壇一九・一九三七年)、同・思溪版大蔵経私会年報第三年・一九三八年)、同・宋代思溪版大蔵経和第二年、中興館閣録(善本叢書第一輯・中央図書館・一九七一年)。

南 禅 寺 一蔵 命 観所縁縁論 大東急記念文庫蔵 号字函 大般若波羅蜜多経巻四九四

等によれば

が字句にやや異同のある後者のものが、の各巻末に前者が、また、これと内容はほとんど変らない

長滝寺・岩谷寺蔵

涇

撰集百縁経巻五

南 禅 寺 蔵 履字函 長阿含経巻二二

夏 阿毘達磨俱舎論巻三枝 阿毘達磨界身足論巻上多 院 蔵 連 阿毘達磨識身足論巻六

に、どちらか不明であるが

中 **尊** 寺 蔵 書・経 法苑珠林巻五一・七六

の巻末に貼りたしたものらしい。められていて、経の本文とは別刻しておいて、右の諸経論

にもあるという。両者ともに、全一四行が二折の一紙に収

とに違いはない。 は「法宝蔵司□」の朱印があって、これらについては別に ない。なお、この僚巻の巻四九一首の眉上には、横書の 般若波羅蜜多経の本文はずっと固い調子のそれと字様の異 る。一方、大東急記念文庫の大般若波羅蜜多経巻四九四末 学の思溪版には、ほかにもこの題記は一切ないようであ 記がなくて終り、それが付着していた形迹もない。大谷大 題があり、このところは南禅寺のものの写真とまったく同 一考したいが、ともに南宋初のいわゆる前思溪版であるこ るものであって、題記はこの経に続けて雕られたものでは の題記は観所縁縁論のものとまったく同版であり、かつ大 版とみうけられるが、そのあと第五折は余白であって、題 五葉(刻工葛方)は五折あって、第四折に観所縁縁論の尾 り継がれているようで、両者の字様は極似している。大谷 るが、大蔵経(大蔵会編・百華苑刊・一九六四年)五二%" 「円覚蔵司自紙板」の墨印があり、大谷本の紙背の折目に 大学図書館蔵の無想思塵論・観所縁縁論二経同巻の巻末第 の写真によれば、観所縁縁論の尾題にすぐ続けて題記が貼 南禅寺の観所縁縁論は従来よく紹介されてきたものであ

(14) 南宋的雕版印刷(文物・一九六二年一期)一六%--。

文時中、陞直宝文閣、 (紹興六年八月丙辰) 知湖州 直徽閣両浙西路提点刊嶽公事字

〔建炎以来繋年要録巻一〇四〕

直宝文閣知湖州宇文時中、移知遂寧府、従所請也。 張浚所引、故称疾而有是命、与義在政府未満歳也。 政殿学士、特遷左太中大夫、知湖州。仍加恩。与義本 (同八年春正月甲午)左中大中参知政事陳与義、為資

(建炎以来繋年要録巻一一八)

終った(宋史巻三七一、金史巻七九)。その生年が元豊二 都華陽の人、次兄の虚中は金との外交に腐心し、建炎二年 直龍図閣 封華陽県男 知潼川に至ったという。宇文氏は成 虚中の弟で、北宋末から南宋初にかけて活躍し、左中大夫 龍図時中哀詞并引(蓮峯集巻一〇)などによれば、粋中、 (一一二八) 金に使したまま抑留され、ついに金に仕えて 宇文時中の伝記は不明のところが多いが、史堯弼の宇文

師保信軍節度使魏国公致仕贈太保張公行状・晦庵先生朱文 三に朱熹と伝を並べる張栻を生んだものである(朱熹・小 四)。時中の女が張浚の後妻となり、宋史巻四二九道学伝 劾されたが、その第一七に妻の父の宇文時中ら親戚を不当 ときの青年宰相張浚が失謀誤国として二〇の罪をあげて弾 るが、時中はそれより数歳は若いことになる。紹興七年、 年(一○七九)であって、紹興六年には五八才になってい に任用したと非難されている(建炎以来繋年要録巻一一

維の雪山図などを蔵する美術愛好家であったと伝える。 文季蒙龍図)の名がしばしばみえ、徽宗の水墨花禽図、王 公文集巻九五)。やはり同時代人の鄧椿の画記には時中(字

- (16) 中国版刻図録図版七四、および宿白氏前掲論文 例表一。
- 17 誌学新六号・一九六六年)。 長沢規矩也・足利学校蔵書の集散について(上・補)(書
- $\widehat{18}$ 語義疏)・一〇五(王状元集百家註分類東坡先生詩)ミ゙ーに 五ミ゙ー。 印影は前掲 足利学校善本図録 四 川瀬一馬・足利学校の研究(講談社・一九四五年)二一 (周易)・四八(論
- (19) 川瀬一馬・駿河御譲本の研究 日本書誌学之研究 所収)。 (書誌学三―四・一九三四

みえる。

- (20) 大垣市立図書館漢籍目録付善本解題 (同館・一九七二
- 21 資治通鑑二九四巻 勅編 元胡三省音註弁誤 通鑑釈文弁誤一二巻 冠 刊 [元] 修 宋司馬光奉

**)、有界、每半葉一○行、 版心は小黒口「(大小字数) 通鑑幾 されている。つぎに容斎随筆の一節が写され、胡三省の 「新註資治通鑑序」から刻本に入る。 双辺(二 一× 一四 通鑑序」は補写であるが、版心の小題・葉数・刻工名も記 首の王磐の「興文署新刊資治通鑑序」と司馬光の「資治 二八六冊 毎行二〇字、 (葉数) (刻工名)」。 注文小字双行。 静嘉堂文庫蔵

6任青甫 2丁士与 13葉文意 吳已 余安斎 江実父 江志高 江伯高 陳君仲 周第 李光奕 呉進甫 黄升貴 陳子華 張伯興 胡志卿 徐文 : 12馮永昌 丁師禹 虞文甫 葉正卿 黄叔安 陳文甫 徐文卿 胡時中 周継周 李伯太 呉華甫 呉升高 余君仲 江寿卿 江叔度 江伯海 江仲寮 朱子行 許漢卿 張君茂 9 7余子4 范以貴 呉生老 江仲績 江公 付文徳 丁実口 ·俞慈 [李求□ 肖子光 余君亮 江青甫 江君吉 虞文斌 黄善卿 黄子一 陳以敬 郭信徳 張季祥 翁文忠 葉克明 范興宗 呉可九 余子恭 江吉甫 江公評 虞以徳 葉杞宗 黄善敬 黄子通 陳以徳 陳七 張和甫 翁禔甫 姚君実 辰希文 李子明 余馬児 江青卿 江君美 付友実 フ文 10凌善慶 8周季方 虞君賜 陳子和 連季仲 姥祖敬 李永員 呉可久 江梅溪 江天其 黄達夫 黄子応 陳外秀 張叔夷 余敬仲 江君寔 付智高 余平父 刁文質 5丘文粲 4王子與 11張希文 席善珍 周寄周 江四 虞良卿 黄徳明 黄升安 陳光甫 陳子厚 張明甫 胡仲昭 李光于 吳昭甫 余巖仲 余仲容 江清甫 江君裕 江成甫 付賓

> 劉克明 劉子明 虞智文 劉季和 劉子昭 虞漢臣 劉義高 劉元善 詹宗海 劉銓孫 劉允善 詹慶二 15劉二高 察松青 劉伯把 劉伯起 劉子仁

鄭七才

6 仲仁 3 子求 10祖珍 11惟志 文忠 仲良 文福 子美 12 淳卿 仲貴 子興 君宝 文鎮 5世明 (4)仁老 仲賢 達公 宗敬 午平 希孟 以貴 √8叔意 7克昭 雲海 必遇 15徳明 叔彝 克敏 正卿 第9若興 伯英 永明

徳謙16興宗

にも思える。 にも思える。 にも思える。 にも思える。 にも思える。 にも思える。 にも思える。

これの同版本は比較的多いが、王磐の興文署新刊資治通

鑑序を備えるものは、天禄琳琅書目著録の二〇函一六冊なとごく稀のようである。この序に、興文署が良工を召集とごく稀のようである。この序に、興文署が良工を召集をごく稀のようである。この序に、興文署が良工を召集とごく稀のようである。この序が補写とあるだけに微妙なるものが少くないから、この序が補写とあるだけに微妙なるものが少くないから、この序が補写とあるだけに微妙なところで、これを直ちに興文署刊と断定はできない。しかし、刊年がこの三、四〇年の間に絞られることはたしかである。もっとも、王国維は、王盤の致仕が至元二一年までで、胡注の成立が二三年であるから、興文署刊本は無注本であるとしている(元刊本資治通鑑音注跋・観堂集林巻二一)。

元至治二年福州三山郡学刊 明成化一〇年 万暦一七(22) 通志二〇〇巻(欠巻五八・五九・九三) 宋鄭樵撰

一一八冊

内閣文庫蔵

行、毎行二一字、注文小字双行。版心白口「通志三皇紀第序の初葉は補写。左右双辺(二九×一九・四ギ)。有界九行と当途県主簿衰某らの銜名はなく、つぎの鄭樵の通志総央図書館金元本図録 一四八メ゙ー)「至治二年九月印造」の一あるが、至治元年の呉繹の疏とそれに続くという(国立中あるが、至治元年の呉繹の疏とそれに続くという(国立中方に至治二年(一三二二)三山郡斎における呉繹の序が

一 (葉数)」のように題し、上象尾に大小字数、下象尾に刻工名を刻する。明代の補版は主に成化の版が大黒口、下暦版が白口で、上象尾に「成化十年/吏部重刊」(陰刻)、「萬曆十七年刊」の補刊年記の入ったものがある。なお刻「萬曆十七年刊」の補刊年記の入ったものがある。なお刻「萬曆十七年刊」の補刊年記の入ったものがある。なお刻「萬曆十七年刊」の補刊年記の入ったものがある。なお刻「萬曆十七年刊」の補刊年記の人ったものがある。なおのがいる。

2丁君美 江衍 王二 呉正 余伏亨 伯奴 丁容 吳正乙 伯玉 江復亨 江成 危祖 付安定 王素老 王十二 余復享 誓 李嬭奴 呂公慈 呉君宝 江住 江士堅 付定 王智夫 王大手 丁荘 伯先 江善 阮付才 呂文正 呉章 何鳴皐 江意 江伯寿 江六甫 余寿 丁鎮道 4王一 王台 8官子忠 呂文振 呉欽 呉友山 江福 江泰 王君粋 余二介 江太 朱乙 7伯太 余子真 呉方午 江崇 江元三

10徐子明 12 骨崇甫 蔡公許 劉四九 黄五 陳君仲 陳介夫 張陳甫 連君礼 葉辛六 黄応五 陳祥恵 范四 施八 謝友直 18魏子敬 盧福(芦福·炉福 虞晋 黄順 15劉九 13葉元記 劉正卿 蔡君甫 施公賜 葉崇 黄寿 陳順 陳和 陳太 陳十才 梁太初 張林 徐明 范仲美 胡生子 虞恵 黄午 游二 連竜 盧陳福 魏平叔 蔡牧 劉季夫 劉子全 黄福 徐徳潤 范子需 詹仲耀 葉崇甫 葉世禄 黄必大 游四 陳順甫 陳和孫 陳文卿 章進宝 張叔鱻 高青甫 范禾甫 陳士安 頼元甫 蔡勝 劉子周 葛秀甫 陳五乙 覚官 魏徳夫20厳子敏 劉記 詹復亨 葉岊仲 童世禄 陳若虚 陳子禾 高得明 施文意 黄徳 張奉 翁留 黄意 陳照 范明 16盧岩 鮑陳 劉照 施明甫 劉仁仲 黄善 童蒙 陳実父 陳祐甫 陳必遇 陳子和 覚産 張明 連子青 詹輝 真乙 葉辛一 黄徳明 高徳明 14熊已 11 17応子涌 陳丁六 張明甫 連子美 虞君恵 葉辛乙 黄善楽 馮昌 陸全 陳恵 陳仲山 陳六 范升高 黄旺 范雪

ない。元の刻工は前本とほとんど変りがない。
○○巻、一二四冊。巻一~六は補写で、補別が進み、万暦の八・二三・二四・四五・四六・四七年、崇禎元年の補刊一八・二三・二四・四五・四六・四七年、崇禎元年の補刊

院刊 後至元五年余謙修 〔明〕再修 一二〇冊(3) 文献通考三四八巻 元馬端臨撰 元泰定元年西湖書

静嘉堂文庫蔵

チセン) 0 かなり減っている。 の刻工もこの両者を含めており、それも中央図書館本より もはや泰定の原刻、 この明初修本よりさらに後修本であることをものがたる。 図録所掲(図七七)のものと明らかに異って明版であり、 刻工名を欠くものもある。 名)」。ただし明代の補刻が相当に多く、粗黒口で、字数・ 版心は線黒口、「(大小字数)文献通考巻幾 修補のことを述べている。左右双辺(二四・四×一八・三 通考目録末に至元又五年(一三三九)の江浙等処儒学提挙 余謙の叙記があって、泰定五年(一三二四)刊のこの本の 張鏡容旧蔵本で李待問、 有界、毎半葉一三行、毎行二六字、注文小字双行。 至元の補刻の区別はつけがたく、つぎ 巻一首葉は中央図書館の金元本 黄丕烈らの読識語がある。文献 (葉数) (刻工

6朱明 汝敬 7君仲 李寿 秀卿 10翁子和 子華 3山番(潘) 4元吉 元亨 文甫 王子仁

内閣文庫にはもら一本、清の蔣琦旧蔵の通志があり、二

11陳義 12華甫 雇恭 13詹仲亨 15劉子和 鄭林

17薛子日

(2) しばしば宋刊本と称されてきたいわゆる正徳一〇行本注(2) しばしば宋刊本と称されてきたいわゆる正徳一〇行本注

が、静嘉堂文庫蔵の完本二〇〇冊に拠って、論語註疏解経十行本注疏考(書誌学三―六・一九三四年)に説かれた

残存し、ほかに六年、一六年のものなどのあることが報告記は大半が切りとられているが、一二年のものがわずかにいることが明らかにされ、またその考証に、原刻刻工がこいることが明らかにされ、またその考証に、原刻刻工がこ版心中央に「泰定丁卯」(刻工王英玉)と刊記が雕られて巻一首葉の版心下象尾に「泰定四年程瑞卿」、巻三 首葉の

にあらわれる元代の刻工はつぎのとおりである。されている。孝経註疏と爾雅註疏は明版で、この二書以外

2七才(鄭) 3子仁 以徳 天易 安卿(余) 希孟 丘文 王英玉 天錫 文仲 子明 朱文 王国祐 古月(胡) 文甫 子興 王栄 7伯玉 6仲明 5以清 子応 4仁甫 以善 王君粋 伯寿(陳)

范奥则 10宸 時中,11国祐(H) 崔徳甫 張徳宗文 明景梅。昭甫 胡古月茂卿 英玉(王)君祐 君善 呂善。3和甫(劉)季和季孟(百)年,任郎(江)余中 余安卿 君美 君錫(王)安卿(余)希孟 朱文 江住郎,"伯玉(由寿(奥)

善応 智夫 智文 程瑞卿 童卿 3瑞卿(程)清甫 進秀 陳百寿 陳伯寿12善卿 善慶

德誠 德遠(業) 德謙 蔡寿甫 鄭七才 16興宗 15劉知甫 劉徳元 徳山 徳元(劉) 徳成 徳甫(崔)

葉徳遠

14寿甫

(蔡) 漢臣

禔甫

詹応祥

17応祥(詹) 弥高 21鉄筆

心からお礼を申しあげる。 しいただいた静嘉堂文庫はじめ各図書館・文庫のご厚意に これら宋元刊本の調査にあたって、貴重書の閲覧をお許

追記

この稿の校正中に再び大谷大学図書館で思溪円覚蔵経の、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追補の、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追補の、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追出とない。そのほか一部に南宋中期以降の補刻葉を混えるもはない。そのほか一部に南宋中期以降の補刻葉を混えるがはない。そのほか一部に南宋中期以降の補刻葉を混えるもはない。そのほか一部に南宋中期以降の補刻葉を混えるもはない。そのほか一部に南宋中期以降の補刻葉を混えるもはない。そのほか一部に南宋中期以降の補刻葉を混えるもはない。そのほか一部に南宋中期以降の補刻葉を混えるもいるが、いまは刻工名を追補の、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追補の、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追補の、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追補の、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追補の、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追補の、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追補の、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追補の、別版をもって補った経があるが、いまは刻工名を追補の、別様を表し、